博　多　149

—博多遺跡群第195次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1267集

２０１５

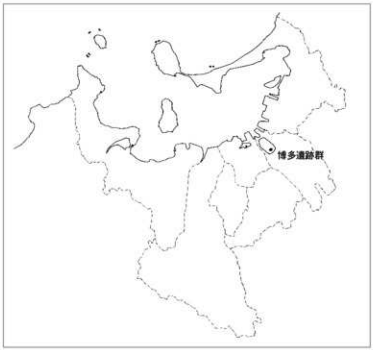
福岡市教育委員会

HAKA　　TA

博　多　149

—博多遺跡群第195次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1267集



遺跡略号　HKT-195
調査番号　1304

2015

福岡市教育委員会

序

玄界灘に面して広がる福岡市は、古くから大陸との文化交流の門戸として発展を遂げてきました。福岡市内には数多くの歴史的・文化的遺産が残されており、それらを保護し、後世に伝えることは、現在に生きる私どもの責務であります。

では、近年の著しい都市化の中で失われてしまう埋蔵文化財の発掘調査を実施し、記録保存によって後世まで伝えるよう努めています。

本書は、立体駐車場建設に伴って実施した博多遺跡群第195次調査について報告するものです。今回の調査では、主に平安時代から戦国時代にかけての中世都市「博多」の一部を確認するとともに、多くの貿易陶磁器を中心とする遺物が出土しました。これらは対外交流の拠点として発展してきた博多の歴史を解明していく上での重要な資料となるものです。今後、本書が文化財保護に対する理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究の資料としてもご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の作成に至るまで、事業主である博多総鎮守　櫛田神社様、施工の旭工務店様をはじめとする関係者の方々にはご理解とご協力を賜りました。心から感謝申し上げます。

平成27年３月25日

福岡市教育委員会
教育長　　酒井　龍彦

例　言

1．本書は、福岡市博多区冷泉町102・111・112・113・127番地内において、福岡市教育委員会が立体駐車場建設工事に伴い、平成25（2013）年５月25日から同年８月12日にかけて発掘調査を実施した博多遺跡群第195次調査の報告書である。
2．発掘調査および整理・報告書作成は、民間受託事業として実施した。
3．報告する調査の基本情報は下表のとおりである。
4．本書に掲載した遺構の実測図作成および写真撮影は、調査担当の井上繭子・吉田大輔が行った。
5．本書に掲載した遺物の実測図作成は、吉田・谷直子・中尾祐太・本田浩二郎・相原聡子が、写真撮影は吉田・本田が行った。
6．本書に掲載した挿図の製図は、林由紀子・谷・相原・中尾・吉田が行った。
7．本書で用いた方位は磁北で、真北より６°40′西偏する。
8．調査で検出した遺構については、土坑をSK、溝をSD、集石・集積遺構をSXとし、通し番号を付している。なお、調査時に土器群①～⑩とした遺構は、整理時に土器群①～⑨をSX101 ～ 109、土器群⑩をSK110と変更した。
9．本書で記述する遺物の分類、説明等については以下の文献を参考とした。
太宰府市教育委員会 2000『大宰府条坊跡ＸＶ-陶磁器分類編』太宰府市の文化財第49集
10. 本書に関わる記録類･遺物等の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵されるので活用されたい。
11. 本書の執筆および編集は吉田が行った。

遺　跡　名	博多遺跡群	調　査　次　数	第 195 次	遺　跡　略　号	HKT-195
調　査　番　号	1304	分布地図図幅名	049 天神	遺跡登録番号	0121
申請地面積	1,287.57㎡	調査対象面積	180㎡	調　査　面　積	125㎡
調　査　期　間	平成 25（2013）年５月 25 日～８月 12 日			事前審査番号	24-2-819
調　査　地	福岡市博多区冷泉町 102・111・112・113・127 番				

本 文 目 次

Ⅰ．はじめに……1
1．調査に至る経緯……1
2．調査の組織……1
Ⅱ．遺跡の立地と環境……2
Ⅲ．調査の記録……4
1．概要……4
1）調査の経過……4
2）調査の概要……4
2．遺構と遺物……5
1）第1面……5
（1）土坑（SK）……5
（2）集積遺構（SX）……10
（3）第1面包含層出土遺物……13
2）第2面……16
（1）土坑（SK）……16
（2）石積遺構（SX）……22
（3）集積遺構（SX）……22
（4）墓（SK）……28
（5）第2面包含層出土遺物……34
3）第3面……34
（1）溝（SD）……34
（2）土坑（SK）……41
（3）獣骨集積遺構（SX）……42
（4）第3層包含層出土遺物……42
4）第4面上層および第4面……42
（1）溝（SD）……42
（2）土坑（SK）……43
5）ガラス製作関連遺物・ガラス製品・鋳造関連遺物……44
Ⅳ．結語……45

挿 図 目 次

第1図　博多遺跡群位置図（1/25,000）……2
第2図　調査区位置図（1）（1/1,000）……3
第3図　調査区位置図（2）（1/250）……3
第4図　調査区北壁・西壁・東壁土層実測図（1/80）……5
第5図　第1面調査区全体図（1/60）……6
第6図　SK10・13・27実測図（1/40）……7
第7図　SK10出土遺物（1/3、1/4）……8
第8図　SK13・27出土遺物（1/3、1/4）……9
第9図　SX 1・33・41・48実測図（1/40）……10
第10図　SX 1・33・41・48出土遺物実測図（1/3、1/4）……11
第11図　第1面包含層出土遺物（1/3）……12
第12図　第2面調査区全体図（1/60）……14
第13図　SK53・110実測図（1/30）……15
第14図　SK110出土遺物実測図（1/3、1/4）……15
第15図　SK53出土遺物実測図（1/3、1/4）……16
第16図　SK57実測図（1/40）および出土遺物実測図（1）（1/3、1/4）……17
第17図　SK57出土遺物実測図（2）（1/3、1/4）……18
第18図　SX72実測図（1/30）および出土遺物実測図（1/3、1/4）……19
第19図　SX101～109実測図（1/40）……20
第20図　SX101～103・105・106出土遺物実測図（1/3、1/4）……21
第21図　SX106・107出土遺物実測図（1/3、1/4）……22
第22図　SX108・109出土遺物実測図（1/3、1/4）……23
第23図　SK54実測図（1/20）および出土遺物実測図（1/3）……24

第24図　SK76実測図（1/20）および出土遺物実測図（1/3）……25
第25図　第2層包含層出土遺物実測図（1）（1/3、1/4）……27
第26図　第2層包含層出土遺物実測図（2）（1/3）……28
第27図　第3面調査区全体図（1/60）……29
第28図　SD74実測図（1/40）……30
第29図　SD74出土遺物実測図（1）（1/3、1/4）……31
第30図　SD74出土遺物実測図（2）（1/4）……32
第31図　SD74出土遺物実測図（3）（1/3）……33
第32図　SD74出土遺物実測図（4）（1/3）……34
第33図　SD74出土遺物実測図（5）（1/3）……35
第34図　SD74出土遺物実測図（6）（1/3、1/4）……36
第35図　SK82実測図（1/30）および出土遺物実測図（1/3）……37
第36図　SX78実測図（1/20）……38
第37図　第3層包含層出土遺物実測図（1/3、1/4）……39
第38図　第4面上面および第4面調査区全体図（1/60）……40
第39図　SD81・83実測図（1/40）……41
第40図　SD83出土遺物実測図（1/3）……42
第41図　SK84・85実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）……43
第42図　ガラス製作関連遺物・ガラス製品・鋳造関連遺物実測図（1/1、1/3）……44

写真図版目次

図版1　（1）第1面調査区全景（南東から）
（2）第2面調査区全景（南東から）
図版2　（1）第3面調査区全景（南東から）
（2）第4面調査区全景（南東から）
図版3　（1）SK10（北から）
（2）SK13（北西から）
（3）SK27（西から）
（4）SX 1（北西から）
（5）SX48（北から）
（6）SX33・41・48（東から）
図版4　（1）第1層A－1区
明青花碗出土状況（北から）
（2）第1層E－1区
陶器瓶・青磁皿出土状況（南から）
（3）SK53（南から）
（4）SK110（北東から）
（5）SK53・110および
SX72・101～109（北西から）
（6）SX72・101～109（北から）
図版5　（1）SK54（東から）
（2）SK54（南東から）
（3）SK54 青銅製品出土状況（1）
（北西から）
（4）SK54 青銅製品出土状況（2）
（西から）
図版6　（1）SK76上層（北から）
（2）SK76（東から）
（3）SK76 頭部付近近景（南西から）
（4）SK57（西から）
図版7　（1）SK76・SX78（南東から）
（2）SX78 検出時の状況（南東から）
（3）SX78 掘り下げ時の状況（南東から）
（4）SD74（南東から）
図版8　（1）SD74（北から）
（2）調査区西壁土層
（3）調査区東壁土層
（4）SK82（西から）
（5）SK84（南西から）
図版9　出土遺物（1）
図版10　出土遺物（2）
図版11　出土遺物（3）
図版12　出土遺物（4）

Ⅰ．はじめに

1．調査に至る経緯

2012（平成24）年11月27日付で、福岡市博多区冷泉町102･111･112･113･127番地内（敷地面積：1287.57㎡）における立体駐車場建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会が、博多総鎮守櫛田神社より福岡市経済観光文化局文化財部埋蔵文化財審査課宛てになされた。申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である博多遺跡群に含まれること、また申請地の一部で1997（平成９）年に発掘調査（第103次調査）が実施され、地表下約200㎝以下において中世を主体とする埋蔵文化財が確認されていることから、建築物の構造によっては発掘調査が必要となること等について申請者と協議を行った。その結果、工事対象面積906.4㎡のうち予定建築物の基礎が集中し、埋蔵文化財への影響が回避できない部分180㎡については記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。

その後、2013（平成25）年５月１日付で博多総鎮守 櫛田神社を委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財調査業務委託契約を締結し、同年５月25日より発掘調査を、翌平成26年度に整理・報告書作成を行うこととなった。

2．調査の組織

調査委託　博多総鎮守　櫛田神社

調査主体　福岡市教育委員会（発掘調査：平成25年度・資料整理：平成26年度）

調査総括	文化財部埋蔵文化財調査課	課長	宮井善朗（25年度）
			常松幹雄（26年度）
		同課調査第２係長	榎本義嗣（25･26年度）
庶　務	文化財部埋蔵文化財審査課	管理係長	和田安之（25年度）
			内山光司（26年度）
		管理係	川村啓子（25･26年度）
事前審査	文化財部埋蔵文化財審査課	事前審査係長	加藤良彦（25年度）
			佐藤一郎（26年度）
		同課事前審査係主任文化財主事	佐藤一郎（25年度）
			池田祐司（26年度）
		同課事前審査係文化財主事	森本幹彦（25年度）
			板倉有大（26年度）
調査担当	文化財部埋蔵文化財調査課	調査第２係主任文化財主事	井上繭子
		（26年度：埋蔵文化財審査課空港協議等担当主査）	
		文化財主事	吉田大輔

発掘作業　岡田伸司　小野千佳　香月隆　兼田ミヤ子　工藤幸男　後藤勝年　竹原吉秋
塚本よし子　豊丸秀仁　野口リウ子　花田則子　花田昌代　松下由希子　光安晶子

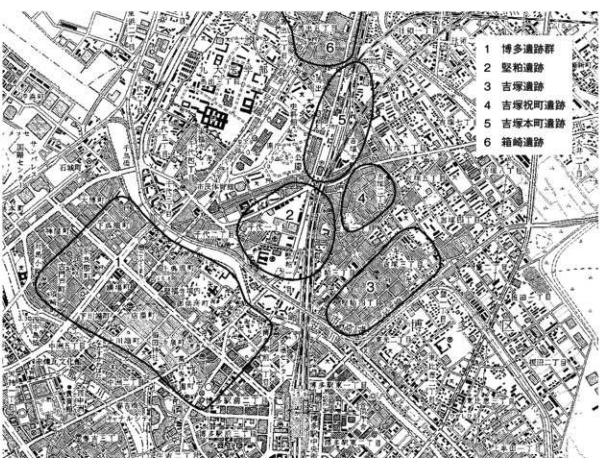
整理補助　相原聡子　谷直子

整理作業　有島美江　林由紀子　松尾トシエ

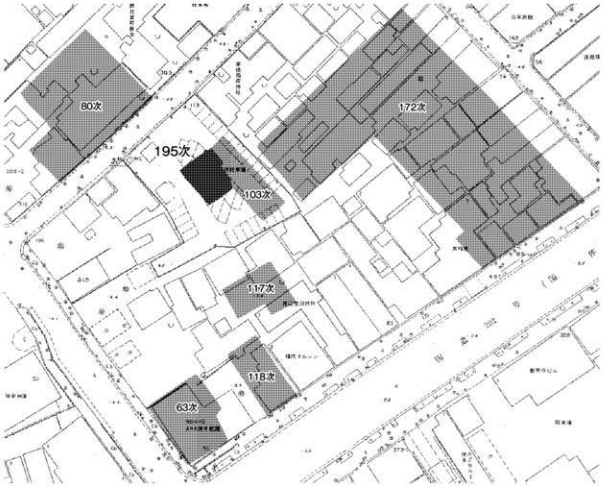
Ⅱ．遺跡の立地と環境

博多遺跡群は、玄界灘に面する博多湾岸に形成された古砂丘上に位置し、西を博多川（那珂川）、東は江戸時代に開鑿された石堂川（御笠川）、南は石堂川開鑿以前に那珂川に向かって西流していた旧比恵川（御笠川）によって画されている。本遺跡群の立地する砂丘は大きく３列に分けられ、内陸側から砂丘Ⅰ、砂丘Ⅱ、砂丘Ⅲと呼称される。砂丘Ⅰと砂丘Ⅱは「博多浜」と仮称され、両者は南西から北東にのびる狭長な谷部によって区分される。また砂丘Ⅲは「息浜」と呼ばれ、砂丘Ⅱの前面に遅れて形成された砂丘である。今回報告する第195次調査区は、上述した砂丘ⅠとⅡを分ける谷部の西側に位置し、砂丘Ⅰ内陸側の緩い斜面に立地している。

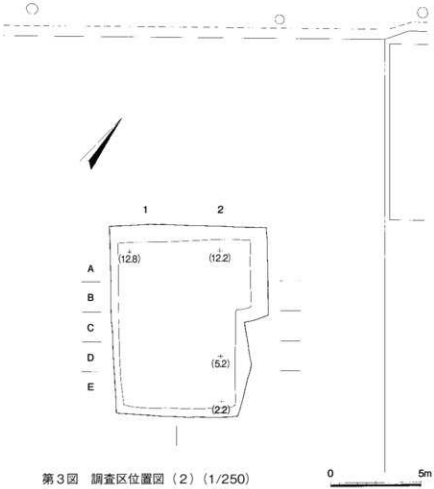
本調査区周辺の旧町名は「社家町」で、すぐ東側に位置する櫛田神社の神官の居住地であった場所である。櫛田神社は、大宰大弐であった平清盛が自身の所領である肥前国神埼荘所在の櫛田神社を勧請し創建したとする説がある。櫛田神社自体は、天正年間（1573～92）の争乱によって焼失し、その後の再建時に社殿が南向きから現在の東向きに改められたとされている。復元された旧地形から考えると、創建時は北側の砂丘頂部に近い、西側斜面上に位置していたと推測される。また、中世都市「博多」では、古代律令期に溝による区画が出現して以来、これに多少影響を受ける形で各所に主軸の異なる建物跡や町割りの方向を示す溝が発見されている。本調査区を含む博多浜西部地域周辺では、中心部でみられる東西・南北区画ではなく、砂丘の傾斜に直交するような方位の町割りがみられる。この区画は、「博多浜」の西側に存在していた「冷泉津」の港湾施設を軸にした町割りと推定されている。



第１図　博多遺跡群位置図（1/25,000）



第２図　調査区位置図（１）（1/1,000）



第３図　調査区位置図（２）（1/250）

Ⅲ．調査の記録

1．概要

1）調査の経過

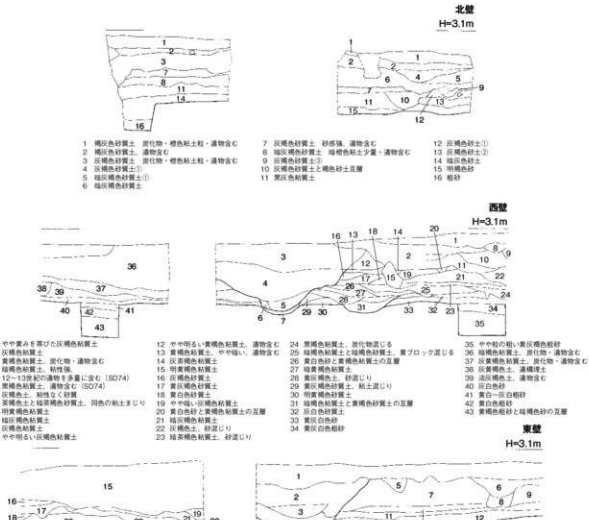
発掘調査は、2013（平成25）年5月25日に開始した。調査の対象は「Ⅰ．－1調査に至る経緯」のとおり、立体駐車場の基礎となる杭が集中する範囲180㎡とし、調査に先立って H 鋼・鋼板による土留め工事を行った。その際、過去の構造物が残存していたために H 鋼・鋼板を打ち込むことができない部分があったため、当初予定していた範囲より若干狭く調査区を設定せざるを得なかった。また、鋼板が表土鋤取りを行う、地表下約2ｍまでの打ち込みであったので、鋼板から1ｍ程度引きをとり、周囲を犬走り状に残しながら掘り下げたため、実際の調査面積は第1面で125㎡となった。

調査はまず、試掘調査および隣接する第103次調査の成果を参考にして、地表下約2ｍまで重機によって表土を除去し、その後人力で遺物包含層を掘り下げながら第1面を設定し、遺構の検出、掘削、精査を行った。第2面以降も同様に人力によって包含層を掘り下げ、人為的に調査面を設定しながら、第4面までを確認し調査を行った。上述したように土留めの鋼板から1ｍほど引きをとり、勾配を付けながら掘り下げたため、下面になるにしたがって調査面積は徐々に狭くなっている。なお、各面で確認された遺構は適宜、写真撮影を行い、また1/10・1/20の図面を作成して記録した。全作業が終了した同年8月12日に機材等を撤収し、第195次調査を完了した。

2）調査の概要

本調査区は、「Ⅱ．遺跡の立地と環境」でも前述したように、砂丘ⅠとⅡを分ける谷部の西側に位置し、砂丘1内陸側の緩い斜面に立地している。調査時に設定した各調査面の概要と層序について、第4図に示した調査区壁土層のうち西壁土層に基づいて説明する。土層図の上面は重機により掘り下げた面の上面である。調査では、4面の調査面を設定したが、いずれも明確な整地層等によって面を捉えられたものではなく、人為的な遺構検出面である。第1面は標高約2.7～2.8mの1～3層の遺物包含層上面で設定した。第1面では、16世紀後半には廃絶されたと考えられる土坑や13世紀の土坑、13～14世紀の土師器皿の集積遺構、柱穴等が検出された。第2面は、第1面から20～30cm程掘り下げた標高約2.5～2.6mの2・3・36層途中で設定し、12世紀中頃～後半に位置づけられる墓2基や陶磁器の廃棄土坑等が検出されている。第3面は、第2面から20～30cm程掘り下げた4・36層途中の標高2.2～2.4mで設定した。12～13世紀代の輸入陶磁器類や礫等が多量に出土する溝や獣骨の集積遺構等が確認された。第4面は、基盤となる砂層上面で設定した。標高は1.5～1.6m前後である。8世紀代の須恵器が出土した土坑1基、小穴27基が検出され、同時期の土師器や須恵器が出土している。また、古墳時代の土師器や弥生土器が少量出土したが、これらの時期の遺構は確認されなかった。第3面から第4面への掘り下げ途中の標高約1.7m前後で遺構が検出されたため、第4面上層として調査し、溝1条、土坑1基、小穴9基を確認した。遺構の時期は11世紀後半～12世紀前半代と考えられる。この第4面上層は、調査区北西側および南東側において設定した。第4面調査後はトレンチを設定し、各所で深掘りをしたところ、標高約1.0m付近で湧水点となった。

なお、本文中で調査区における遺構の位置を示す際には調査時に設定した平面座標を基準とした英字（北西側から南西側に向かってA～E）と数字（南西側を1、北東側を2）を組み合わせたグリッド表記（例：A－1区）を用いて表記する。



第４図　調査区北壁・西壁・東壁土層実測図（1/80）

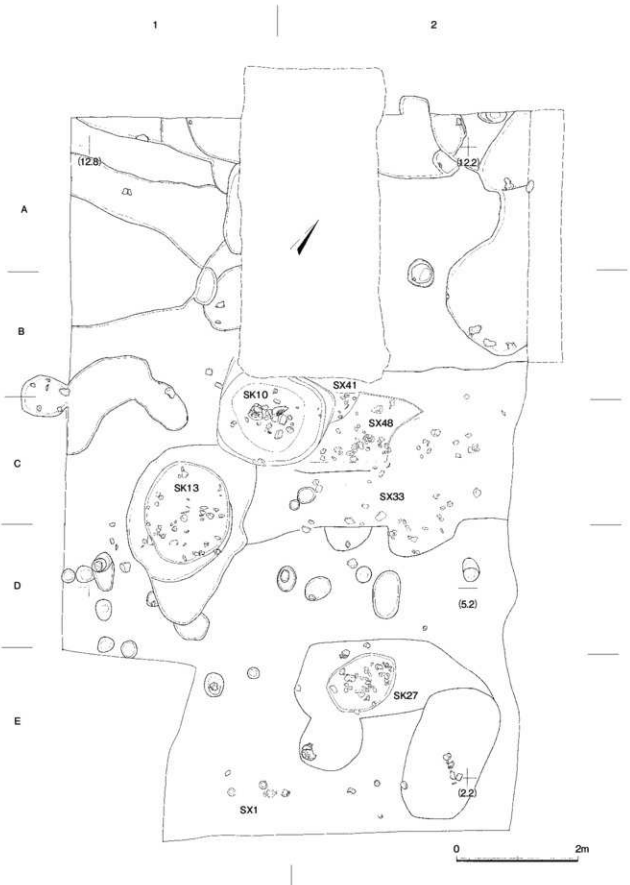
2．遺構と遺物

1）第１面（第５図）

標高2.7 ～ 2.8m 前後で設定した。13 ～ 14 世紀の遺構を主体に、16 世紀代の遺構も確認できた。

（1）土坑（SK）

SK10（第６図）　調査区の中央付近Ｂ・Ｃ－１区に位置する。北西部分を近代以降の構造物に壊されているが、長軸 1.75m、短軸 1.55m 程のやや潰れた円形を呈する。深さは 0.35m を測る。中央付近で輸入陶磁器や国産陶器、瓦、石臼等がまとまって出土した。16 世紀後半には廃絶された土坑であろう。

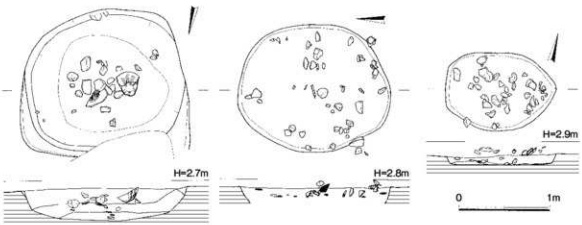


第５図　第１面調査区全体図（1/60）

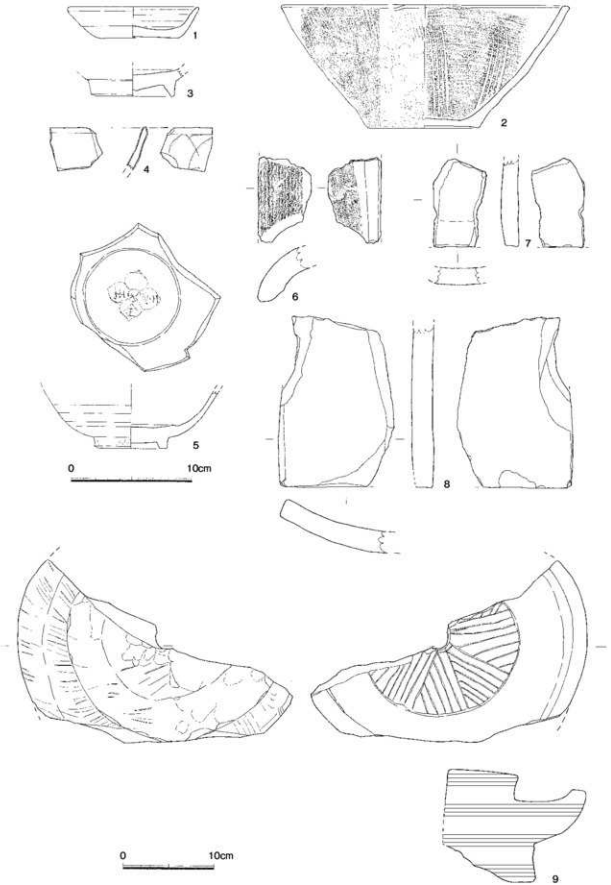
出土遺物（第７図）　１は土師器坏で、口径10.4cmを測る。底部糸切りで、板状圧痕が残る。内外面はヨコナデ調整される。２は瓦質土器擂鉢で、外面は刷毛目調整後、粗くナデ消される。体部周辺には、指オサエがみられる。内面には４条単位の擂目が11本施される。３は白磁碗の底部で、高台および高台内は露胎である。内面は施釉され、細かい貫入がみられる。４・５は龍泉窯系青磁碗である。４はⅡ－ｂ類の口縁部片で、直線的に立ち上がり、外面には片切彫りによる鎬蓮弁文を有する。５は内外面に施釉されるが全体に薄い。高台畳付と高台内は露胎である。内面見込みには４枚の花弁の中に「金玉□（満）堂」の文字が陰刻される。６～８は瓦で、６は丸瓦、７・８は平瓦である。６の外面には縄目叩き、内面には布目痕が残る。７・８の胎土はやや粗く、白色砂粒を多く含む。７は明橙色を呈し、二次的に被熱した可能性もある。９は茶臼の下臼である。砂岩製で１/２程が欠損する。受皿部下面から基台部にかけては叩き仕上げが施され、基台内は鑿による加工痕が顕著に残る。臼の目は６～７溝を１単位とした８分画とみられる。溝は直線ではなくやや歪んでいる。他に白磁碗Ⅳ類、龍泉窯系青磁碗Ⅰ・Ⅱ類、明代の白磁高台付皿や小坏、明青花Ｃ群碗、高麗青磁碗、中国陶器、大内系土師器等が出土した。

SK13（第６図）　SK10の南側Ｃ－１区に位置する。長軸1.6m、短軸1.3mの楕円形を呈し、深さ0.2m程を調査したが、底面は明確ではない。13世紀後半～14世紀前半の土坑であると考えられる。

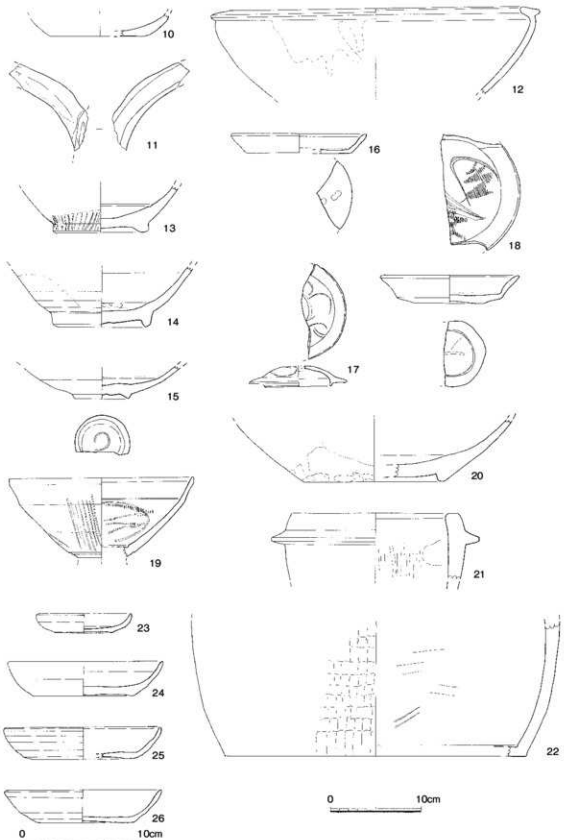
出土遺物（第８図10～22）　10は土師器坏で、底部はヘラ切り離し、器面は丁寧なナデ調整が施される。11・12は中国陶器である。11は水注の注口で、暗褐色釉が施される。12は鉢で、口縁部は折り曲げられ玉縁状に肥厚される。口縁部上面には目跡が残る。全体に薄く茶褐色の釉が施される。13～15は白磁で、13・14は碗、15は皿である。13はⅣ－１ｂ類で、高台部分は露胎である。内面見込みに沈線があり、それより内側は大きく凹む。14は体部下半から高台内は露胎、体部上半から内面には灰白色釉が施される。内面見込みは輪状に釉剥ぎされる。15の口縁端部は口禿となる。16は青白磁壺で、かえり部分は露胎である。天井部にはヘラにより草花文が描かれる。17は高麗青磁皿で、暗緑色釉が施される。高台畳付の釉は削り取られ、白色耐火土の目跡が残る。内面見込みは小さく一段凹む。18・19は同安窯系青磁である。18は皿Ⅰ－２ｂ類で、見込みにヘラ・櫛状工具による施文を有する。全面施釉後、底部の釉が粗く削り取られる。19はⅠ－１ｂ類の碗で、外面は縦方向の櫛目文、内面は片切彫りと櫛状工具により施文され、見込みには深い圏線がある。20は青磁壺の底部とみられ、内外面に灰オリーブ色の釉が施され、底部には白色耐火土の目跡が残る。21・22は滑石製石鍋で、21は断面台形状の鍔を有する。内面に擦痕が多くみられ、一部に煤が付着する。22は外面底部付近に煤が多く付着する。この他に白磁碗Ⅳ類、白磁皿Ⅵ類、龍泉窯系青磁碗Ⅰ類、



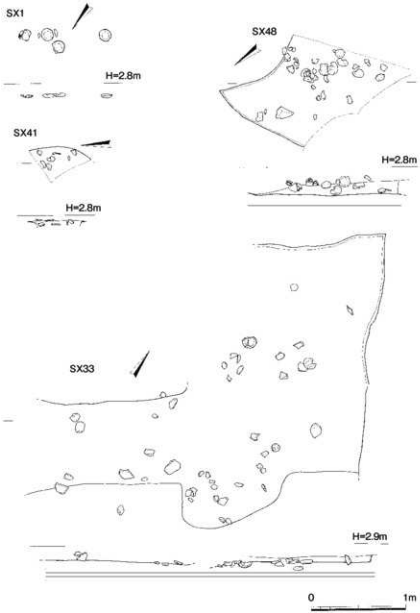
第６図　SK10・13・27実測図（1/40）



第７図　SK10出土遺物（2・6～9は1/4、その他は1/3）



第8図　SK13・27出土遺物（21・22は1/4、その他は1/3）



第９図　SX １・33・41・48実測図（1/40）

同安窯系青磁碗Ⅰ類、青白磁合子、中国陶器盤・壺、獣骨等が出土した。

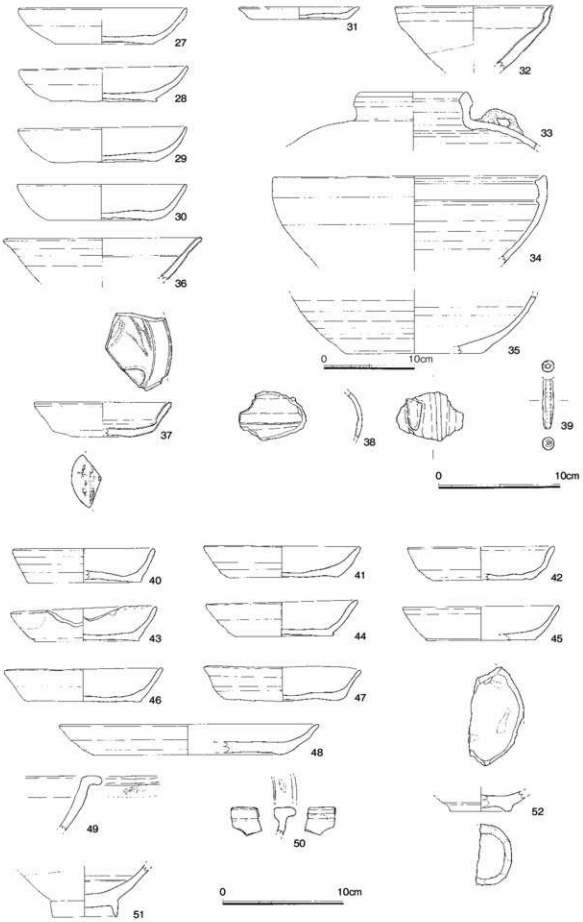
SK27（第６図）　調査区の南東側Ｄ－２区に位置する。長軸1.67m、短軸0.8mの不整な楕円形を呈し、深さ0.1mを測る。上層および下層付近で土師器皿・坏を主体とする遺物や５～10cm程の礫が出土した。13～14世紀の土坑に位置付けられよう。

出土遺物（第８図23～26）　23～26は土師器である。23は底部糸切りの皿で、口径7.6cmを測る。24～26は坏で、口径12.5cm前後を測る。いずれも底部糸切りで、24・26には板状圧痕が残る。他に白磁碗Ⅱ・Ⅳ類、龍泉窯系青磁碗Ⅱ類、中国陶器等が出土した。

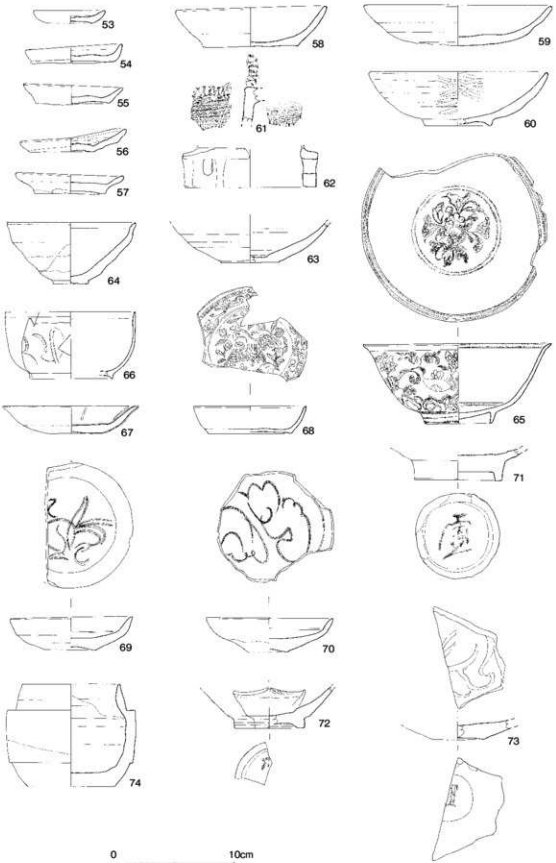
（２）集積遺構（SX）

報告するSX33・41・48は隣接し、重複しているようにもみえるが、調査時に遺物のまとまりとして認識したものであり、明確な新旧関係にあるものではないと考えられる。

SX１（第９図）　調査区南東端の中央部、Ｅ－１・２区で検出された。約１mの範囲にほぼ完形の土師器坏が４個体出土したが、掘り込み等は確認できなかった。14世紀代の遺構と考えられる。



第10図　SX 1・33・41・48出土遺物実測図（33～35は1/4、その他は1/3）



第11図　第１面包含層出土遺物（1/3）

出土遺物（第10図27～30） 27～30は土師器坏で、口径13.3～13.5cm、内外面ともヨコナデ調整され、内底部には不定方向のナデ調整がみられる。底部は糸切りで、板状圧痕が残る。これら以外の遺物は出土していない。

SX33（第9図） 調査区の東側、C－2区に位置する。長軸2.3m、短軸0.6～1.5mの範囲に土師器皿・坏のほか、中国陶磁器類、礫等が出土した。13世紀後半～14世紀前半の遺構と考えられる。

出土遺物（第10図31～39・52） 31は土師器皿で、復元口径9.6cmを測る。底部は糸切りで板状圧痕が残る。32～35は中国陶器である。32は天目碗で、黒色釉が厚くかけられ、その上に褐色釉が流しかけられる。体部下半以下は露胎である。33は耳壺で、厚く肥厚された口縁に短く直立する頸部がつき、肩は大きく張る。肩部に縦耳が貼付される。胎土は灰色で白色砂粒を多く含む。外面には暗茶褐色の釉が施される。34・35は鉢で、胎土は暗赤灰色を呈し、大粒の白色砂を多く含む。34の口唇部は強く内傾し、凹面をなす。その下に断面三角形状の突帯1条を有する。内面は磨滅している。35の外底部には砂・粘土混合の目跡が残る。36・37は同安窯系青磁で、36は碗、37はⅠ－2b類の皿である。36は外反する口縁をもつ。内外面に灰オリーブ色の釉が施され、体部下半は露胎である。内面に1条の沈線がある。37は黄色を帯びた灰青色を呈する。内面見込みにヘラ・櫛状工具による施文を有する。全面施釉後、底部の釉が掻き取られる。底部には墨書があるが判読できない。38は青白磁で、縦耳を有する小型の耳壺あるいは水滴の類であろうか。39は管状土錘で、片方の端部がわずかに欠損する。52は越州窯系青磁で輪状高台の碗である。やや暗い黄緑色を呈し、胎土は淡灰黄色で砂感が強くやや粗い。全面施釉後、高台畳付の釉が削り取られる。内面見込みおよび高台畳付に目跡が残る。この他に白磁碗Ⅳ・Ⅷ類や口禿の皿、龍泉窯系青磁碗Ⅰ・Ⅱ類、高麗青磁蛇の目高台碗、鉄製刀子等が出土した。

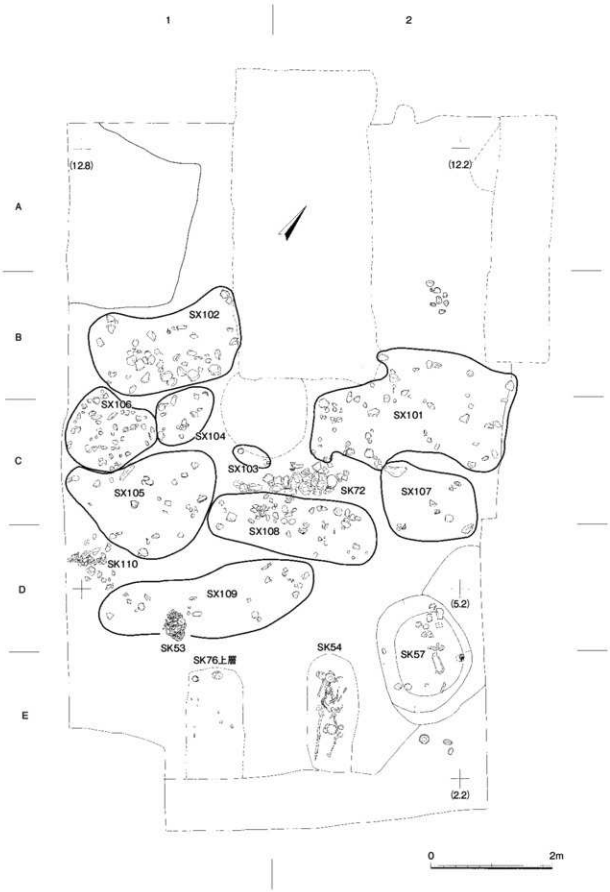
SX41（第9図） 調査区の中央付近、C－2区で検出された。SK10と西側で重複し、これよりも古い。65cm×45cmの範囲に土師器皿・坏が10個体ほどまとまって出土したが、完形のものはない。底面は明確に確認できていない。出土遺物については、編集時のミスで図示できなかったが、主な出土遺物である土師器は、口径8.0～11.4cmの皿と口径13cm前後の坏に大別できる。この他に白磁碗、同安窯系青磁碗や中国陶器鉢等が出土した。13世紀代の遺構に位置付けられよう。

SX48（第9図） SX41の東側に位置する。長軸1.5m、短軸1m程の範囲に土師器坏を主体として、中国陶器や滑石製石鍋等の遺物がやや南側に偏って出土した。13世紀前半頃の遺構と考えられる。

出土遺物（第10図40～51） 40～48は土師器坏で、40～47は口径11.0～12.4cm、48は復元口径20.6cmを測る。底部は全て糸切りで、板状圧痕の残るものもある。43の口縁部には煤が付着しており、灯明皿とみられる。49は土製の鍋で、口縁部はL字状をなし、内外面ともやや目の粗いハケメ調整のあと、ナデ調整される。外面には煤が付着する。50は中国陶器鉢の口縁部とみられ、L字形を呈し、内面は若干突出する。口縁上面に目跡を有する。釉は灰緑色で、内面から口縁部外面下位まで施釉される。51は白磁碗Ⅴ類で内面に浅い段が巡る。体部下半以下は露胎である。この他、白磁皿Ⅵ類、龍泉窯系青磁碗Ⅰ・Ⅱ－b類、中国陶器の茶釉四耳壺、青白磁碗などが出土している。

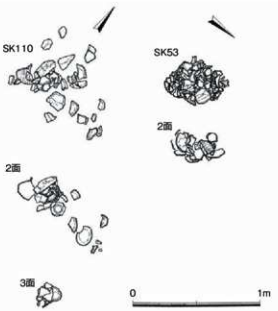
（3）第1面包含層出土遺物（第11図）

ここでは、第1面から第2面間の包含層掘削時に出土した遺物を報告する。53～59は土師器で、53は口径5.6cmを測る小皿である。54～57は口径7.6～9.2cmを測る皿である。58・59は坏で、58は口径12.1cmを測り、底部は糸切り、内外面ともナデ調整される。59は復元口径15.0cm測る。底部はヘラ切りで、口縁部付近は丁寧にナデ調整される。60は断面三角形の低い高台が貼付される瓦器碗で、内外面とも丁寧なヘラ研磨が施される。61は土製鍋である。口縁部は欠損するがしているが、

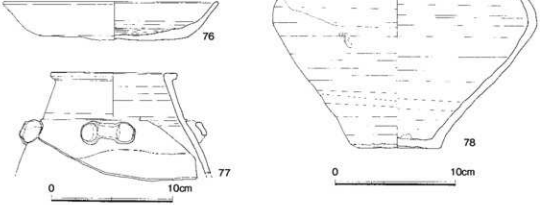


第12図　第２面調査区全体図（1/60）

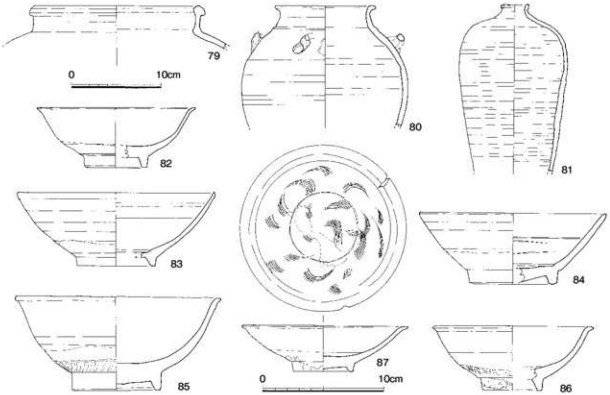
上端には回転縄文が施される。内外面はやや粗いハケメ調整後、ナデ調整される。62は円面硯あるいは杯托の類か。復元径10.7cmの円形の製品で、脚部には不整長方形の透かし孔を有する。63は須恵器碗である。底部は糸切りで、内外面はナデ調整される。64は天目碗で、暗灰色の胎土に黒色釉が厚く施される。65は明代青花磁器碗C群である。外面には唐草文内面見込みの二重圏線の内側には花弁文が描かれる。高台畳付のみ露胎である。出土状況を図版4-（1）に示した。掘り込みは確認できなかったが、出土状況からピット等の遺構である可能性があろう。66～71・74は白磁である。66は薄胎の小碗で、全面施釉後、口縁部の釉は掻き取られ口禿となる。体部外面にはヘラによる施文を有する。67～70は皿である。67の口縁部はやや外反する。底部はわずかに抉れ、露胎である。体部内面に白堆線を有する。68は皿Ⅸ－1b類に近い特徴をもち、内面には鳥・草花・雷文の精緻な型文を有する。69・70の底部はやや上げ底状で、内面には花文状のヘラ描きが施される。69は体部半ほどでやや緩く内湾気味に立ち上がり、内面には1条の沈線が巡る。全面施釉後、底部の釉が掻き取られている。70の体部下半以下は露胎である。71は白磁碗の底部で、内面見込みは輪状に釉剥ぎされる。体部下半以下は露胎で、底部見込みに「霊」と読める墨書を有する。72・73は青磁で、ともに底部見込みに墨書を有するが判読できない。72は同安窯系の小碗である。内面に櫛状工具による施文と細い沈線を有する。73は龍泉窯系の皿で、全面施釉後、底部の釉が掻き取られる。内面見込みには片切彫りによる花文が施される。74は白磁合子の身である。受け部も含めた器高8.1cmと丈が高く、体部外面下位に段を有する。この段以下および受け部は露胎である。このように12世紀前半～16世紀代におよぶ遺物が出土しているが、主体は13～14世紀代の遺物である。



第13図　SK53・110実測図（1/30）



第14図　SK110出土遺物実測図（78は1/4、その他は1/3）



第15図　SK53出土遺物実測図（79は1/4、その他は1/3）

2）第2面（第14図）

第1面から20～30cm程掘り下げた、標高約2.5～2.6m前後に設定した調査面で、12～13世紀代の遺構を主体に確認した。

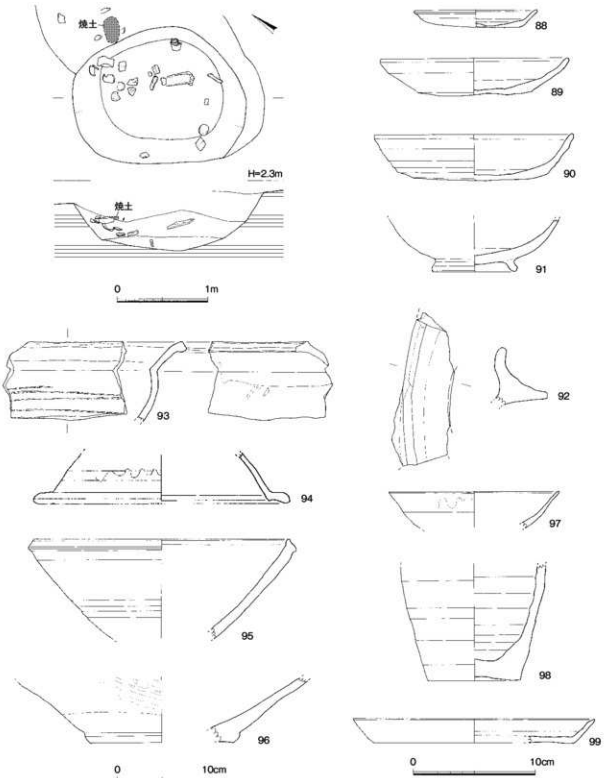
（1）土坑（SK）

SK110（第13図）　調査区南側、C・D－1区に位置する。調査当初は後述する陶磁器の集積遺構（SX101～109）と同様に土器群⑩としていたが、他の遺構と比較して、遺物の出土状況にまとまりと重なりがみられたため、整理時にSKの遺構略号を付し、遺構番号を振り替えた。長軸約0.9m、短軸0.8mの範囲に土師器や陶磁器、20～50cmの礫や獣骨等が出土し、西側に集中箇所がみられる。遺構のプランは明確ではない。13世紀後半の廃棄土坑に位置付けられよう。

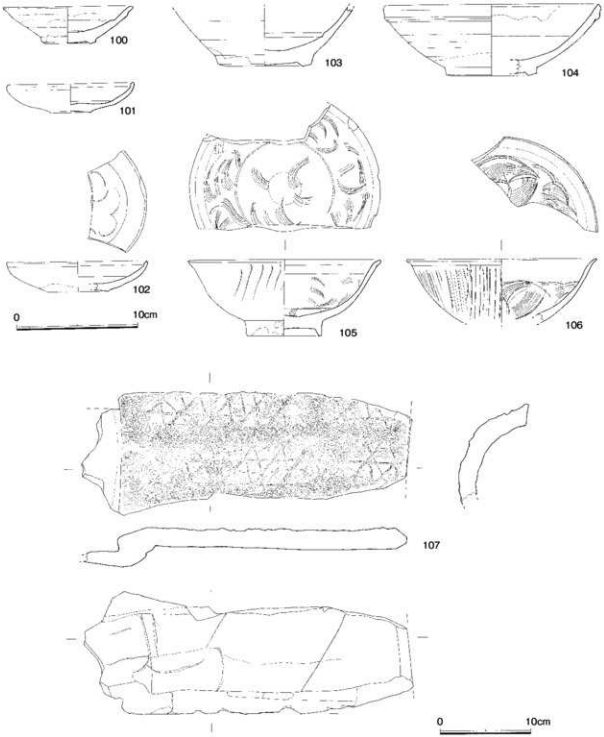
出土遺物（第14図）　75・76は底部ヘラ切りの土師器坏で、75は口径15.5cmを測り、内外面とも丁寧にナデ調整される。76は口径16.9cmを測り、底部には板状圧痕が残る。内面底部はナデ調整されるが水引きの跡が強く残る。77・78は中国陶器耳壺である。77の口縁部はほぼ水平に屈折し、L字状をなす。頸部と肩部の境界には突線が巡り、肩部には横耳が貼付され、肩部には波状沈線を有する。灰緑色の釉が施される。78は肩から胴部上位が大きく張り、そこから底部に向かって直線的にすぼむ。肩部には縦耳が貼付される。口縁部外面から胴部上半まで、緑灰色の釉が薄く施される。この他、白磁碗Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ類や中国陶器鉢、瓦、須恵器甕等が出土している。

SK53（第13図）　調査区の南側D·E－1区に位置する。長軸0.5m、短軸0.4mの不整な菱形を呈し、中国陶磁器を主体とした遺物がまとまって出土した。13世紀中頃～後半の廃棄土坑と考えられる。

出土遺物（第15図）　79～81は中国陶器で、79・80は耳壺、81は小口瓶である。79はにぶい灰緑色の釉が外面から頸部内面付近まで施される。80の口縁部はほぼ水平に屈折し、やや下方に開く

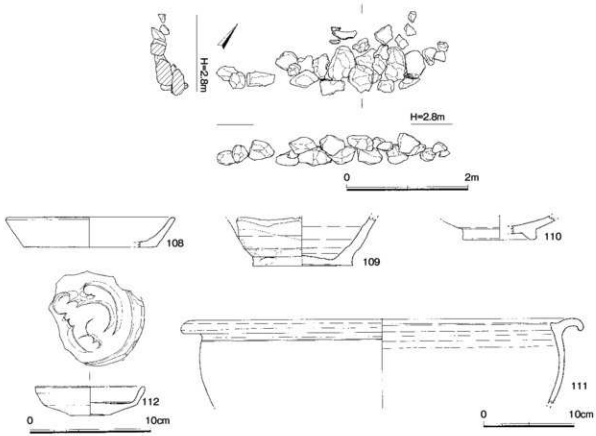


第16図　SK57実測図（1/40）および出土遺物実測図（1）（94～96は1/4、その他は1/3）



第17図　SK57出土遺物実測図（2）（107は1/4、その他は1/3）

短い頸部がつづく。口縁部上面には目跡が残る。頸部と肩部の境界には突線が巡り、肩部には横耳が貼付される。胴部は球胴に近く、肩部には波状沈線が施される。胎土は灰色を呈し、全体に黄灰白色の釉が薄くかかる。81は短い頸部に、断面四角形に肥厚された口縁部がつく。肩から胴部上位が張り、暗褐色の釉が施される。82～87は白磁碗である。82は碗Ⅵ類で、外面体部下半から高台内は露胎である。83は碗Ⅱ類で口縁部は小さな玉縁状をなす。内面見込みに段が付き、内側が体部よりも

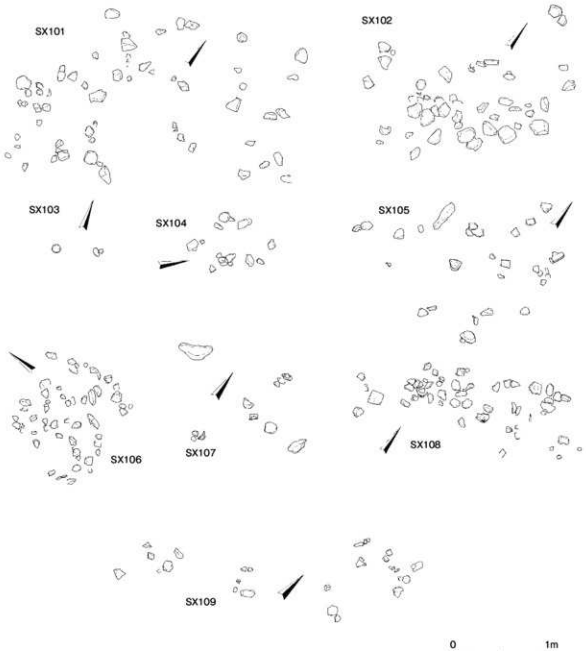


第18図　SX72実測図（1/30）および出土遺物実測図（111は1/4、その他は1/3）

一段凹む。84は碗Ⅷ－２類で、内面見込みは輪状に釉剥ぎされ、見込みには段を有する。85は碗Ⅴ－３ａ類であろう。口縁端部は小さく丸められ一見玉縁風に仕上げられる。86は碗Ⅵ類で、口縁部は外反し上面が鋭く水平となる。内面見込みは輪状に釉剥ぎされる。87は碗Ⅵ－１ｂ類で、体部内面に短い弧を描く、櫛目文を有する。体部下半以下は露胎である。この他、中国陶器盤や四耳壺、黒褐釉鉢、底部糸切りの土師器坏、瓦器椀、瓦等の小片が多く出土した。青磁が出土していないのが特徴的である。

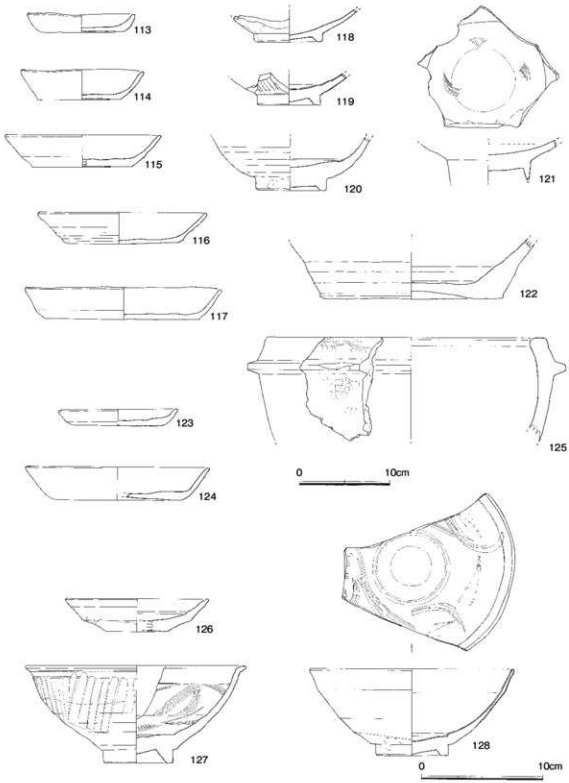
SK57（第16図）　調査区の南東側Ｄ・Ｅ－１区に位置する。長径約２m、短径約1.45mの楕円形状を呈し、深さ0.4～0.6mが残存する。遺構の東半部中位付近から、土師器、中国陶器、瓦、骨、礫等が出土した。遺構掘り方のすぐ北側の0.3×0.2mの範囲で焼土を確認した。12世紀後半～13世紀前半の土坑と考えられる。

出土遺物（第16・17図）　88～91は土師器で、88～90の底部はヘラ切りで、89・90には板状圧痕が残る。88は口径9.7cm、器高1.4cm、底径7.4cm程度を測る皿で、内外面ともヨコナデ調整され、内面見込みは不定方向のナデ調整がみられる。89・90は坏で、89は口径15.0cm、90は口径15.8cmを測る。ともに内外面ともヨコナデ調整される。91は擬状の高台を貼付する椀で、内外面ともナデ調整され、内面見込みは粗くヘラ研磨されている。92は移動式竈の焚口部分で、庇部外面内側には煤が付着する。93・94・96・98は中国陶器である。93は盤で、鍔状の口縁部をもつ。内面から口縁部外面に黄～灰緑色の釉を施し、口縁部の釉は、施釉後拭き取られるが薄く残存する。内面には鉄絵を有する。94はかえりを有する蓋である。天井部外面に暗褐色～茶色釉が施される。96は大型の鉢とみられる。体部には斜め方向の叩き目が残り、外面下位の底部付近は叩き目がナデ消される。98は

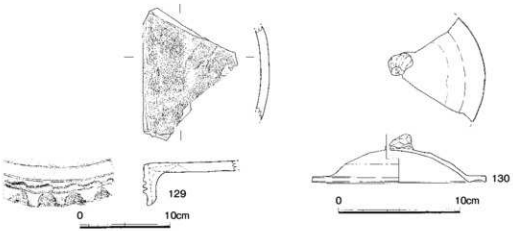


第19図　SX101 ～ 109実測図（1/40）

長胴壺あるいは瓶であろう。外底部以外は灰緑色を呈する釉が施される。95 は須恵質の鉢で、器面は内外面ともヨコナデ調整される。99 は須恵器坏である。底部はヘラ切りで、内外面ともナデ調整される。95 は粗製の高麗青磁皿で、内外面とも濃緑灰色の釉がやや薄くかけられ、その上に白濁釉が施される。100 ～ 105 は白磁である。100 ～ 102 は皿で、100 は皿Ⅲ - 2 類で、内外面に施釉され、高台部分は露胎である。全体に貫入がみられる。101・102 は皿Ⅵ類で、101 は無文、102 は内面見込みに花文状のヘラ描きが施される。底部はわずかに突出し、やや上げ底状となる。103 ～ 105 は碗で 103・104 は碗Ⅳ類であろう。103 の内面下位には段がつき、内側は凹んでいる。105 は碗Ⅴ類で、口縁部は外反し、口縁端部は丸くおさめられる。体部内外面、高台の一部に施釉される。体部外面にヘ



第20図　SX101 ～ 103・105・106出土遺物実測図（125は1/4、その他は1/3）



第21図　SX106・107出土遺物実測図（129は1/4、130は1/3）

ラ描きの弓状縦線、内面には短い弧状の櫛目文を有する。106は龍泉窯系青磁碗で、やや黄色を帯びた緑色の釉が薄く施される。体部外面にはやや目の粗い櫛目文を有する。内面上位には沈線があり、これより内側に櫛状・ヘラ状工具により花文が描かれる。109は玉縁式丸瓦で、胎土は灰色を呈し緻密である。凸面には菱形の叩き、凹面には布目とコビキAの痕跡が認められる。この他小片ではあるが、速江窯系青磁小碗、瓦器椀、格子目叩きの平瓦等を含む遺物が出土している。

（2）石積遺構（SX）

SX72（第18図）　調査区の中央付近やや南東寄り、C－1・2区で検出された。掘り込み等は伴わず、石積みの範囲も不明瞭ではあるが、幅10～20cm程の石が直線的に並ぶ。2段に積まれている部分もあるが積み方はやや雑である。主軸はN-40°-Eにとる。13世紀中頃～後半の遺構であろう。

出土遺物（第18図）　108は底部糸切りの土師器坏で、復元口径15.4cmを測る。内外面ともヨコナデ調整である。109・111は中国陶器で、109は壺か瓶の底部とみられる。内外面ににぶい茶褐色～暗褐色の釉が施され、体部下半以下は露胎である。111は盤で、鍔状の口縁部上面は湾曲し、先端が曲げられる。釉はにぶい黄灰色を呈し、内面と口縁部外面に施釉される。口縁部の釉は施釉後、拭き取られやや薄く残存する。口縁部上面に目跡が残る。110は白磁碗の底部である。112は龍泉窯系青磁皿Ⅰ－1b類で、全面施釉後、底部の釉が掻き取られる。内面見込みに片切彫りで花文が施される。この他に、龍泉窯系青磁碗Ⅰ類、中国陶器擂鉢等の小片が出土している。

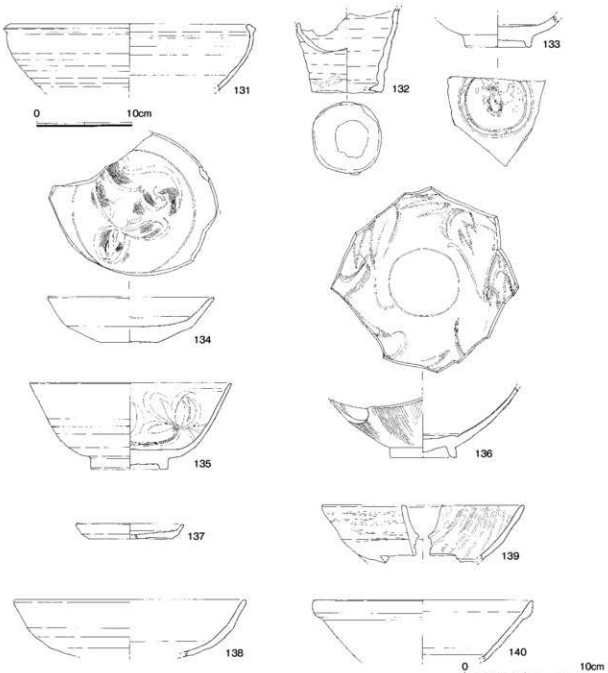
（3）集積遺構（SX）

これらの遺構は調査時には土器群①～⑨とたが、整理時にSXの遺構略号を付し、遺構番号を101～109に振り替えた。各遺構は明確なプランを確認できたわけではなく、遺物等のまとまりとして認定したものである。

SX101（第19図）　調査区の中央部東側、B・C－2区に位置する。土師器の皿・坏を主体に中国陶磁器類や瓦等の遺物や5～20cmの礫が全体にやや散らばって出土した。

出土遺物（第20図113～115）　113～115は土師器である。底部は全て糸切りで、器面は内外面ともヨコナデ調整され、内底部はナデ調整である。113は口径8.6cmを測る皿で、全体に歪む。114・115は坏で、114は口径9.8cmでやや小振りである。115は復元口径14.4cmを測る。この他、白磁碗Ⅴ・Ⅵ類、龍泉窯系青磁碗Ⅰ類、中国陶器の盤、鉢、瓦器椀、縄目叩きの平瓦等の小片が出土した。

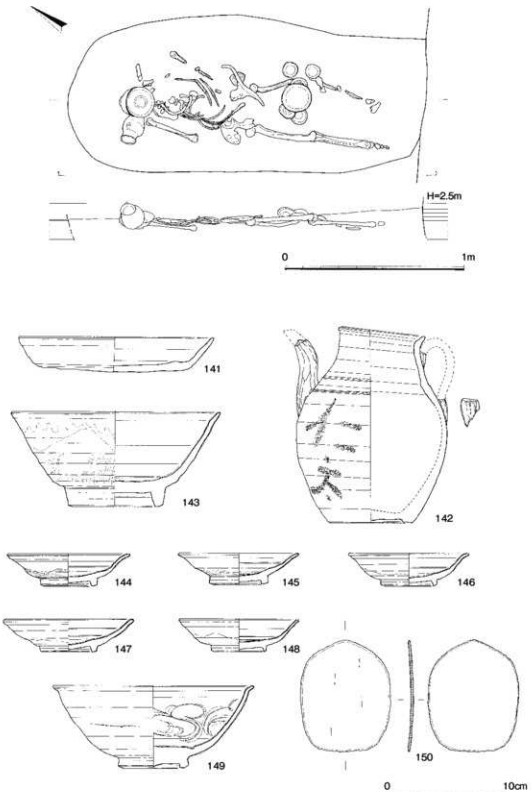
SX102（第19図）　調査区の中央部北西側、B－1区に位置する。土師器の坏・皿を主体として、



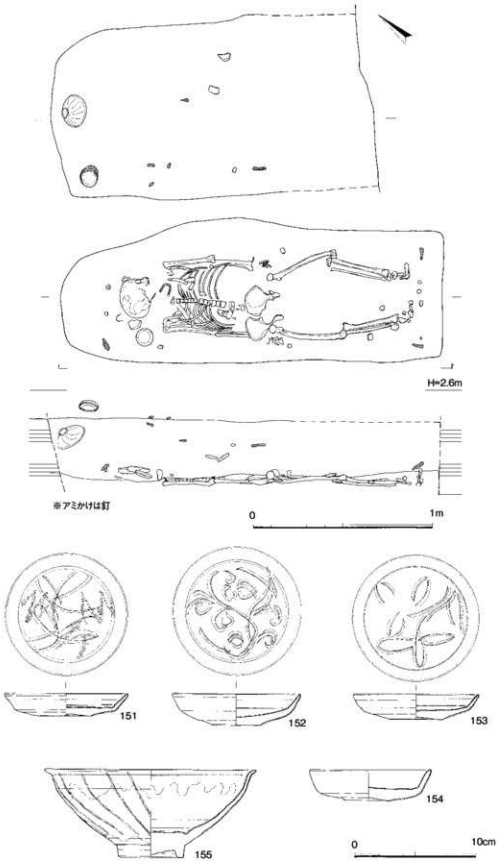
第22図　SX108・109出土遺物実測図（131は1/4、その他は1/3）

中国陶磁器類や瓦等の遺物がやや南東側にまとまって出土し、10～20cmの礫が多く検出された。

出土遺物（第20図116～122）　116・117は底部糸切りの坏である。器面はともにヨコナデ調整される。116は口径13.5cm、117は口径15.6cmを測る。118・121は白磁碗である。118は碗Ⅳ類の底部とみられ、高台は幅広である。内面見込みは凹むが段はみられず、目跡とみられる砂が付着している。119は碗Ⅴ類で、内面には短い櫛目文を有する。119・120は青磁碗である。119は同安窯系青磁碗で、内面見込みと体部との境には大きく段を有する。体部外面に目の粗い櫛目文が施される。120は龍泉窯系碗Ⅰ類で、体部内外面は無文である。122は中国陶器壺や鉢の底部とみられ、上げ底となる。外面底部には砂が付着している。この他、白磁ⅢⅣ・Ⅵ類、龍泉窯系青磁碗Ⅱ－b類、瓦器椀平瓦等が



第23図　SK54実測図（1/20）および出土遺物実測図（1/3）



第24図　SK76実測図（1/20）および出土遺物実測図（1/3）

出土している。

SX103（第19図）　調査区中央部やや西寄り、C－1区に位置し、土師器皿と坏が各1個体出土した。

出土遺物（第20図123･124）　123・124は土師器皿と坏である。ともに底部は糸切りで、板状圧痕が残り、器面は内外面ともヨコナデ調整される。123は口径9.4cm、124は口径15.6cmを測る。

SX104（第19図）　調査区の中央付近やや北西寄り、C－1区に位置する。長軸1.0m、短軸0.7cmの範囲で、底部糸切りの土師器坏・皿、白磁碗、龍泉窯系青磁碗、中国陶器の盤・茶釉四耳壺・鉢等が出土したが、小片のため図示していない。10～20cmの礫が多くみられる。

SX105（第19図）　調査区の南東端、C－1区に位置する。土師器坏、中国陶磁器類が出土した。遺物は小片が多く、5～20cmのやや小振りな礫も検出された。

出土遺物（第20図125）　125は滑石製石鍋で、断面台形状の鍔が削り出される。復元口径30.4cmを測り、外面には工具痕が残る。また、体部外面には煤が付着し、内面は磨滅が著しい。この他に底部糸切りの土師器坏や皿が多く出土し、白磁碗Ⅱ類、白磁皿Ⅵ類、龍泉窯系青磁碗Ⅱ－b類、同安窯系青磁碗Ⅰ類、中国陶器の壺・茶釉四耳壺・鉢・瓶・大型容器、瓦器椀、瓦質火舎、縄目の平瓦等の小片が出土している。

SX106（第19図）　調査区の南東側中央付近、C・D－1区に位置し、中国陶磁器を主体とする遺物や10cm前後の礫がまばらに出土した。

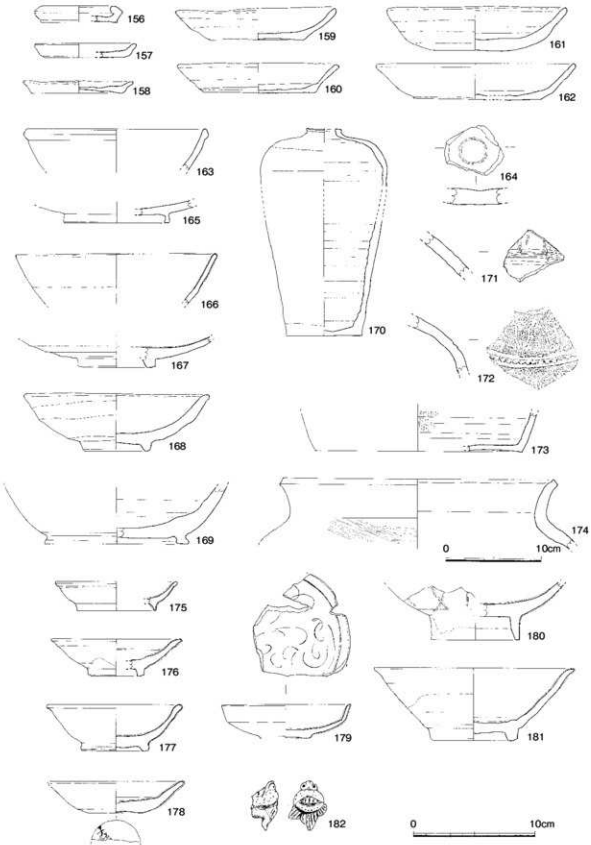
出土遺物（第20図126～128、第21図129）　126～128は青磁である。126は同安窯系青磁皿Ⅰ－a類で、体部中位で屈曲し、外面には明瞭な稜をもつ。127・128は同安窯系青磁碗である。127はⅢ－1b類で、体部外面には幅広の粗い縦の櫛目文、内面上位に沈線を有し、その内側に櫛状工具による花文が描かれる。128は碗Ⅰ－1a類で、体部外面は無文、内面にはヘラ状・櫛状工具による施文がなされる。内面体部と底部の境には段を有し、内底部は凹んでいる。129は軒平瓦で、三条の重弧文が作り出される。中央はヘラ状工具により波状の文様を施し、その下部は波状に押圧が加えられている。この他に白磁碗Ⅳ・Ⅶ類、龍泉窯系青磁碗Ⅰ－4類、中国陶器の盤・四耳壺・短頸壺・鉢、縄目叩きの平瓦・丸瓦等が出土している。

SX107（第19図）　調査区の東側中央部C・D－2区に位置する。白磁碗を主体とした遺物と15～40cmの礫がまばらに出土した。

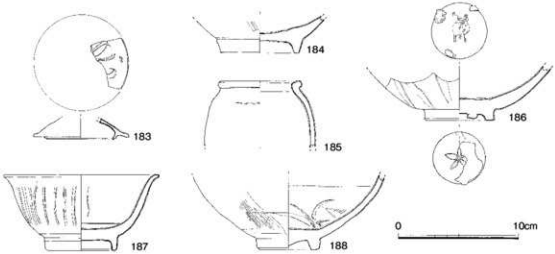
出土遺物（第21図130）　130は中国陶器蓋である。かえりを有し、天井部にはつまみが貼付される。つまみから天井部中位まで暗褐色の釉が施される。この他、底部糸切りで板状圧痕の残る土師器坏、白磁碗Ⅱ・Ⅳ・Ⅶ類、皿Ⅱ類、龍泉窯系青磁碗Ⅰ類、中国陶器茶釉四耳壺等が出土している。

SX108（第19図）　調査区の中央部やや南寄り、C・D－1・2区に位置する。やや北西側に偏って中国陶器を主体とする遺物と10～20cmの礫が出土した。

出土遺物（第22図131～136）　131・132は中国陶器である。131は鉢で、口縁部は折り返して肥厚させ、断面四角形状になる。胎土はにぶい橙色を呈し、精良である。内外面全体に茶褐色釉が施され、口縁部外面に目跡が残る。132は長胴壺あるいは瓶の底部である。残存部分は露胎で、胎土は淡黄灰色～灰色を呈し、砂粒を多く含む。底部に意図的と思われる焼成後の穿孔がある。133～135は龍泉窯系青磁である。133は碗の底部で、灰緑色を呈する釉を全面に施した後、高台畳付と高台内の釉が掻き取られる。高台畳付には目跡があり、高台内には墨書があり花押と思われる。134はⅢⅠ－1類で、底部の釉は掻き取られ露胎となる。内面見込みには片彫花文と短い弧状の櫛目が施される。135は碗Ⅰ－2b類で、口縁部は丸く、わずかに外反する。体部下位が張り、重心が低い。口縁部直下から底部外面まで丁寧にヘラ削りされる。高台畳付および高台内は露胎である。外面は無文、内面には片彫



第25図　第２層包含層出土遺物実測図（１）（173・174は1/4、その他は1/3）



第26図　第２層包含層出土遺物実測図（２）（1/3）

蓮花文・葉文、短い櫛目文が施される。136は同安窯系青磁碗Ⅰ－１ｂ類で、内面見込みと体部との境に大きく段を有する。内面にはヘラ状工具による花文と櫛状工具による点描文が施され、外面には細かい縦の櫛目文を有する。体部外面下半以下は露胎である。この他に、底部糸切りの土師器坏・皿、ヘラ切りの坏、白磁碗Ⅱ・Ⅳ類、白磁皿Ⅶ類、初期龍泉窯系青磁とみられる碗、中国陶器の盤・黄釉壺・茶釉四耳壺、縄目叩きの平瓦・丸瓦等の小片が出土している。

SX109（第19図）　調査区の南東寄り、Ｄ－１区に位置する。中国陶磁器等の遺物と10cm前後の礫がまばらに出土した。

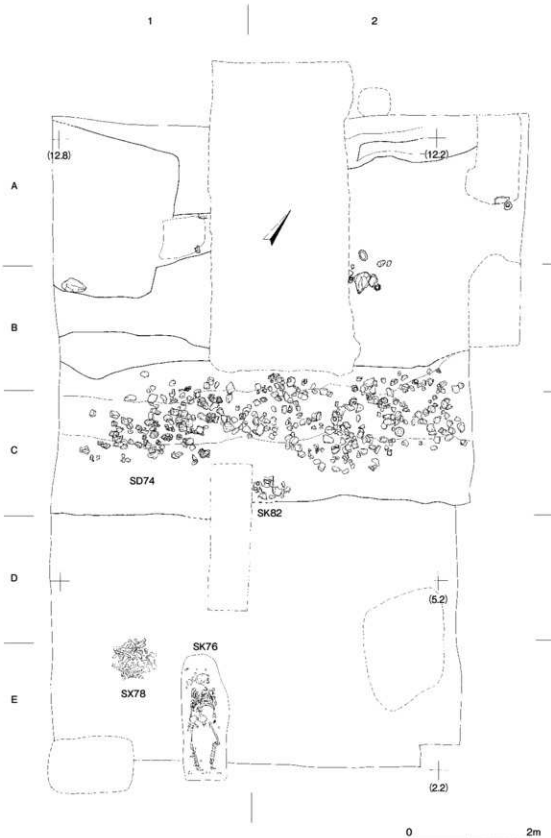
出土遺物（第22図137～140）　137・138は土師器である。137は口径8.6cmを測る皿である。底部は糸切りで、板状圧痕が残る。内外面はヨコナデ調整される。138は椀で、復元口径18.4cmを測る。器面は内外面ともヘラ研磨後、ナデ調整される。139は瓦器椀で、復元口径16.0cmを測る。外面は部分的な横方向のヘラ研磨、内面は全体的に密な縦方向のヘラ研磨が施される。140は白磁椀Ⅳ－１ａ類で、胎土は灰白色、釉は灰色を帯びた白色を呈する。内面底部には沈線が巡る。これらの他、白磁碗Ⅱ類、白磁皿Ⅴ～Ⅵ類、中国陶器の壺、平瓦等が出土している。

以上、集積遺構として９基の遺構とその出土遺物を報告したが、全体として遺物の時期は12世紀前半～13世紀中頃のものである。遺物のまとまりとして認定したものを、それぞれ個別に報告したが、一括して後述する第３面で確認した溝（SD74）の上層と捉えてよいものと考える。

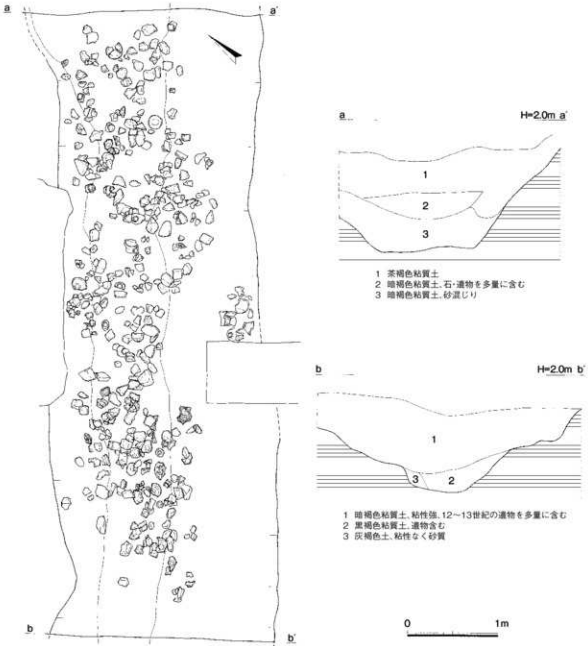
（４）墓（SK）

調査区南東端Ｅ－１・２区で２基の墓を検出した。

SK54（第23図）　隅丸長方形を呈し、長軸は1.9m、短軸は0.8m前後を測り、主軸はN-35°-Wにとる。墓壙掘り方の最下面付近が検出され、床面は明確に確認できなかった。骨は脆くなっていたが、ほぼ全身の骨格が検出された。しかし、頭骨は頭蓋骨片がわずかに確認できたのみである。骨格の位置にほとんど乱れはみられず、右腕は腹～腰部あたりに置き、左腕の肘は強く曲げられている。膝は自然に伸びており、伸展仰臥葬である。被葬者は男性で、年齢は推定可能な部位がなく不明である。副葬品として、頭部付近で水注と白磁碗、青磁碗がそれぞれ１個体ずつ出土し、碗は重ねられていた。また、左脚の膝周辺に土師器坏の下に白磁皿５枚が並べられた状態で検出された。さらに左腰骨の下からは板状青銅製品が出土している。釘や木質は確認されていないため、土坑墓としておく。

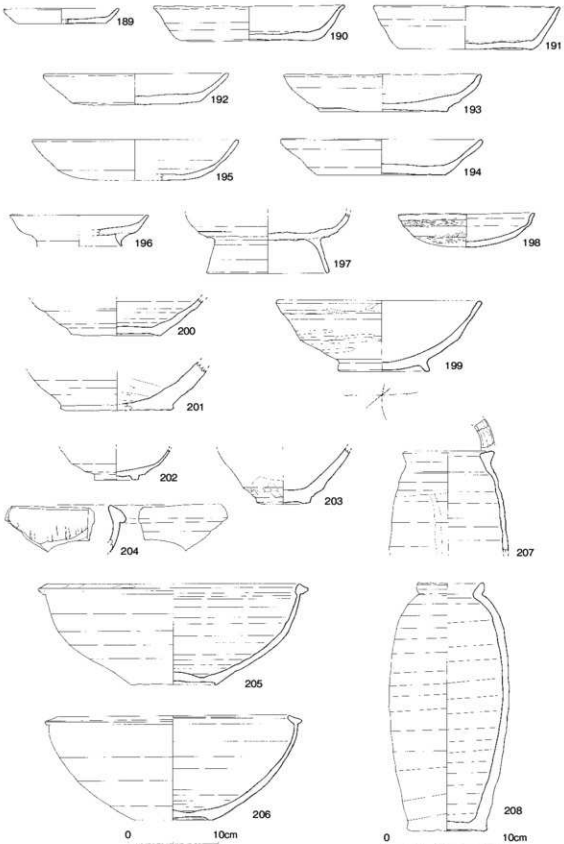


第27図　第３面調査区全体図（1/60）

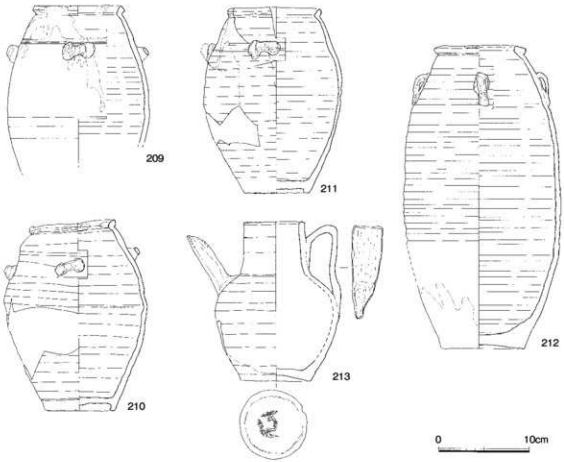


第28図　SD74実測図（1/40）

出土遺物（第23図）　141は土師器坏である。口径15.4cm、器高2.9cm、11.6cmを測る。底部は静止糸切りで、板状圧痕が残る。体部内外面はヨコナデ調整で、内底部は回転ナデの後、一定方向に強くナデ調整される。142は越州窯系とみられる水注で、把手部と注口の先端部が欠損する。胎土は灰色で精緻である。全面施釉されていたものとみられるが、二次的な被熱のため釉が変色し、一部は溶け落ちている。体部には墨書があり「仁太」と読める。143は白磁碗Ⅷ類である。乳白～乳灰白色の釉が内面から体部外面中位まで施され、それ以下は露胎である。肩部付近に2条の沈線が巡る。内面体部と底部の境には段が付き、その内側は輪状に釉剥ぎされる。体部外面下位には工具痕跡が残る。144～148は白磁Ⅲ類で、144・145・148は内面見込みの釉が輪状に釉剥ぎされる。147はやや厚手、148はやや薄手のつくりである。149は龍泉窯青磁碗Ⅰ類で、暗オリーブ色の釉が施され、高台畳付



第29図　SD74出土遺物実測図（1）（205・206は1/4、その他は1/3）

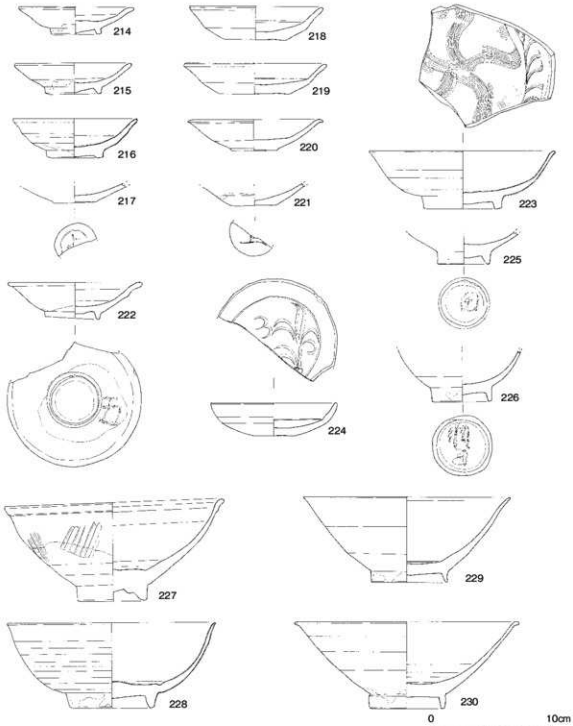


第30図　SD74出土遺物実測図（2）（1/4）

および内部は露胎である。体部外面は無文、内面には片切彫りの花文が描かれる。内底部には使用痕とみられる擦痕がある。150はわずかに湾曲する薄い板状の青銅製品である。平面形は楕円形に近いが、一端は山形となる。外面には、繊維質および木質が付着しており、この製品が布に包まれ箱に入れられていた可能性が考えられよう。また、この木質が木棺に由来するものとも考えられ、釘等は出土していないが木棺墓であった可能性もあろう。以上の出土遺物から12世紀中頃～後半の墓に位置付けられよう。

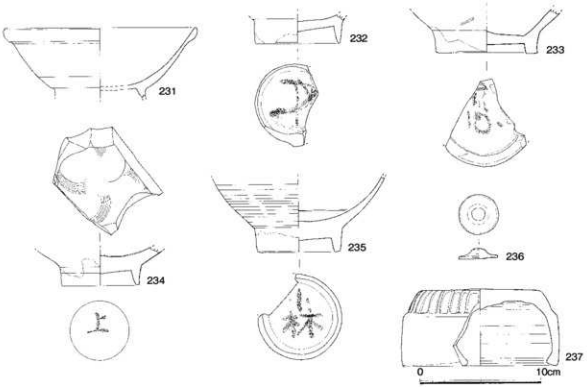
SK76（第24図）　墓壙は隅丸長方形を呈し、長軸2.1m、短軸0.7m前後を測る。墓壙上面から人骨下端までの深さは0.3m前後である。主軸はN-40°-Wにとる。墓壙上面は第2面で確認したが、人骨の検出・精査および取り上げは第3面で行った。また、墓壙上面で検出した際には、長軸1.3m、短軸0.9m前後の不整な長方形状のプランを確認していたが、実際には下層と同様に長軸2m前後まで南東側に広がっていたのであろう。明確な床面は確認できなかった。人骨は脆くなっていたが、SK54と比較すると遺存状態が良く、ほぼ全身の骨格が確認された。SK54と同様に、伸展仰臥葬である。墓壙上面の上層中央部で白磁碗、西隅で白磁皿2枚と青磁皿1枚が重なった状態で出土した。また、頭部横でも青磁皿が出土している。さらに鉄釘も10個体ほどが出土している。なお釘は人骨の周囲を取り囲むように、1.7m × 0.45m程の範囲で出土しており、この規格の木棺が想定できよう。

出土遺物（第24図）　151は同安窯系青磁皿Ⅰ－2b類で、全面施釉後、底部外面の釉が掻き取られ露胎となる。内面にヘラおよび櫛状工具による施文を有する。152・153は白磁皿Ⅷ類で乳灰色の



第31図　SD74出土遺物実測図（3）（1/3）

釉が厚く施される。全面施釉後、底部外面の釉は掻き取られ、露胎となる。内面見込みにヘラによる草花文を有する。154は龍泉窯系青磁皿Ⅰ－1ａ類で、体部中位で屈曲し、口縁部に向かって直線的に開く。器壁はやや厚い。底部外面の釉は掻き取られ、露胎となる。155は白磁碗で、閩(びん)江下流域の連江浦口窯、福清窯等の製品とみられる。内外面に黄灰オリーブ色の釉が施され、高台部内外面は露胎である。体部内面上位に1条の沈線が巡り、内面体部と見込みの境に段を有する。外面体部にはヘラによる弓形の縦線が施される。以上の出土遺物から、12世紀中頃～後半の木棺墓と考えられる。



第32図　SD74出土遺物実測図（4）（1/3）

（5）第2面包含層出土遺物（第25・26図）

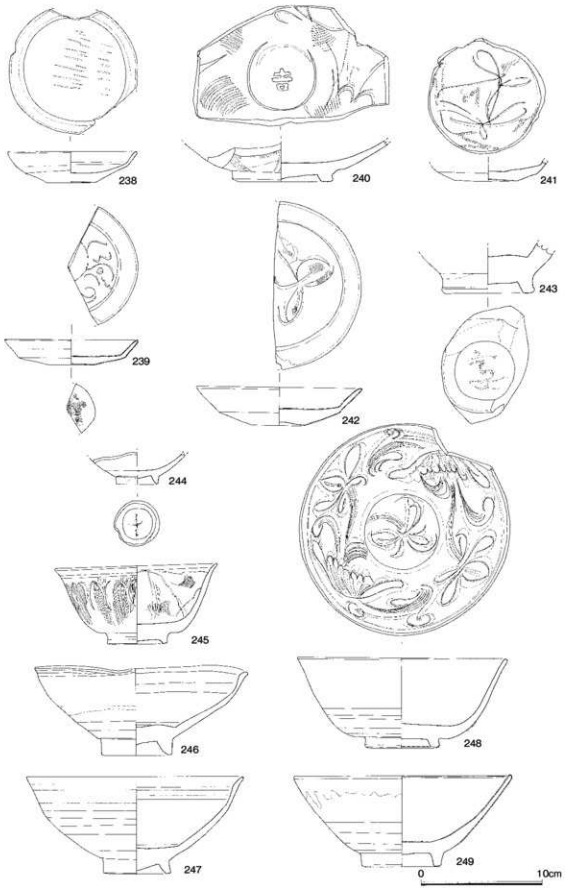
ここでは第2面から第3面間の包含層掘削時に出土した主な遺物について報告する。156～162は底部糸切りの土師器で、156は口径5.4cmの小皿、157・158は口径9～9.5cmを測る皿、159～162は口径12.5～15.8cmを測る坏である。156は小皿としたが、体部は内側に屈折しており異質である。163は土師質の碗で、白磁碗を模倣したものと考えられ、口縁部は玉縁状となる。164は土製トチンで、周縁部が欠損する。片面は円形にわずかに凹む。165は低温で焼成された緑釉陶器で、高台内以外に暗灰オリーブ色の釉が薄く施されている。166・167はやや軟質の陶器で、白色釉に部分的に緑釉が流しかけられている。166は碗のように復元したが、体部を少しねかせ皿とした方がよいかもしれない。口縁端部には暗褐色の釉が施される。体部下位は露胎である。167は内外面に施釉されるが、体部外面以下は露胎で、内面見込みは輪状に釉剥ぎされる。外面には細かい貫入がみられる。170は中国陶器小口瓶で、短い頸部から肩部にかけて大きく張り、体部は底部に向かって直線的にすぼむ。口縁部内面から外面肩部まで褐色の釉が施され、これ以下は露胎となる。

3）第3面（第27図）

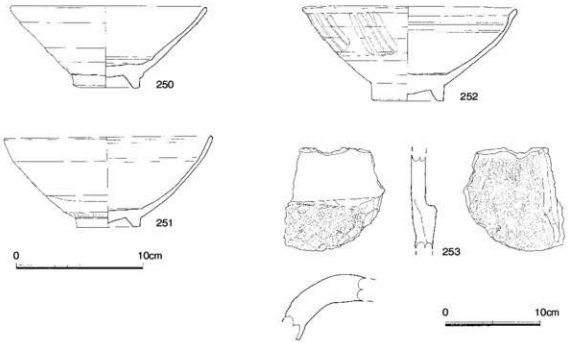
先述のとおり、第2面から20～30cm程掘り下げた、標高約2.2～2.4m前後に設定した調査面である。12～13世紀代の遺構を確認したが、第2面で掘り残したものも含まれる。

（1）溝（SD）

SD74（第28図）　調査区の中央部B・C－1・2区で検出された。調査区を横断し、両端は調査区外にさらに延びている。検出時の幅は2.1～2.3m程度で、多量の土師器や中国陶磁器類を主体として、瓦、骨、10～20cm前後の礫等が多く出土した。主軸はN-53°-Eにとる。覆土は暗褐色～茶褐色粘質土で、出土遺物等を残しながら調査したため、第3面では深さ0.1～0.3m程を掘削し、そ



第33図　SD74出土遺物実測図（5）（1/3）



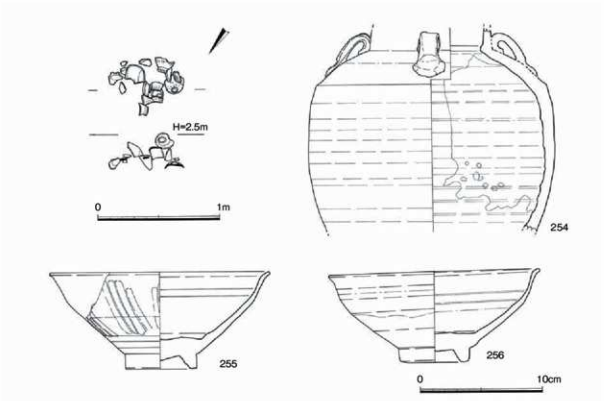
第34図　SD74出土遺物実測図（6）（253は1/4、その他は1/3）

れより下層は第4面で確認した。遺構の形状や規模等の記述は、第4面で確認した下層部分も含めたものである。溝の断面形は略台形を呈し、底部下端の幅は0.3～0.7mを測り、北東側から南東側に向かってやや細くなっている。

調査区東・西壁で確認された土層断面をみると、溝上層は暗褐色粘質土・茶褐色粘質土が0.2～0.4m程度堆積し、その下層に黒褐色粘質土・砂混じりの暗褐色粘質土が0.1～0.2mほど堆積する。西壁の土層でみると、下層に比べ、上層部分は大きく幅が広がっていることがわかる。土層の状況から、第4面で確認した底部付近の幅が狭くなっている部分は、掘削された当初の溝と考えられ、この最初に掘削された溝が埋まっていく過程で、第3面で検出した幅の広い溝に掘り直しおよび拡幅が行われたことが推察される。その後は、覆土の堆積状況や、遺物の出土状況をみても人為的に一気に埋められたものではなく、時間の経過とともに埋没したものと考えられる。SD74は、12世紀前半までには掘削されたとみられ、程なくして若干埋没したところで、拡幅がなされたとみられる。その後、13世紀中頃にはほとんどが埋没し、わずかな窪みとして残った部分に、第2面で確認されたSX101～109の集積遺構、SX72石積遺構がみられるという状況が想定できよう。

出土遺物（第29～34図）　189～197は土師器である。189は皿で、復元口径9.6cmを測る。190～195は口径15～16.5cm前後を測る坏で、190は底部静止糸切り、191～194は回転糸切り、195はヘラ切りである。191・192・194には板状圧痕が残る。器面はすべてヨコナデ調整され、その後内底部はナデ調整される。196・197は高台付坏で、196にはやや内反する短い高台が、197には細く高い高台が貼付される。

198・199は瓦器で、198は坏、199は椀である。198はやや外反する口縁部をもち、内面口縁部下および外面中位は強くナデられている。内外面ともヘラ研磨が施され、外面体部下半は縦方向に研磨した後、横方向の研磨を加えている。199は撥状の低い高台が貼付され、体部外面の大半に体部内面は縦方向、体部外面は屈曲部を中心に横方向のヘラ研磨が施される。高台見込みに十字と斜線を組み



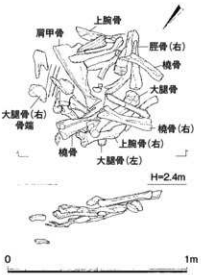
第35図　SK82実測図（1/30）および出土遺物実測図（1/3）

合わせたような細い線刻を有する。

200は須恵器の壺・甕の底部とみられる。底部は糸切りである。胎土は暗灰色を呈する。201は陶器捏鉢の底部とみられ、底部は糸切りである。胎土は暗赤灰色を呈し、外面体部には黒灰色の釉が施される。内面は磨滅している。

202～213は中国陶器である。202は小形の碗で、黄白色の胎土に、暗褐色を呈する釉が施される。体部外面下半以下は露胎である。203は天目碗で、やや茶色を帯びた灰色を呈する緻密な胎土に、黒色釉が厚く施されている。204は擂鉢で、口縁部は折り曲げて肥厚される。暗赤褐色の釉が施され、口縁部と内面体部の境の端部は釉が掻き取られている。内面に擂目を有するが単位は不明である。205・206は鉢で、ともに口縁部は折り返して肥厚させ、「ハ」字状に開き、高台は碁笥底風となる。205は暗褐色で白色砂粒を含む胎土に淡黄緑色の釉が、206は橙色を呈する胎土に淡黄橙の釉が、どちらも全体に薄く施されている。207・208は長胴壺で、207の口縁部は逆三角形に肥厚される。胎土は暗褐色で精良、淡緑色～茶褐色の釉が内面から体部上位まで施される。口縁部上端に目跡が残る。208は灰色で白色砂粒を含む。内外面には、にぶい灰緑色の釉が施される。口縁端部および底部に重ね焼きの痕跡が残る。

第30図209～212は四耳壺である。209～211は、「く」字状に外反する口縁部をもち、肩部に横耳が貼付される。209・211は暗灰緑色の釉が施され、口縁部から胴部外面上半に茶褐色の釉が流しかけられる。また、頸部と肩部の境には2本の沈線が巡り、その下に波状沈線を有する。210はにぶい光沢のある灰緑色の釉が全面に施される。212は折り曲げて肥厚させやや「ハ」字状に開く口縁部をもち、肩部には縦耳が貼付される。胎土は灰青色を呈し精良で、にぶい光沢をもつ暗褐色釉が内面から体部外面下位まで施され、これ以下は露胎となる。口縁部外面上端に白色耐火土の目跡が残る。

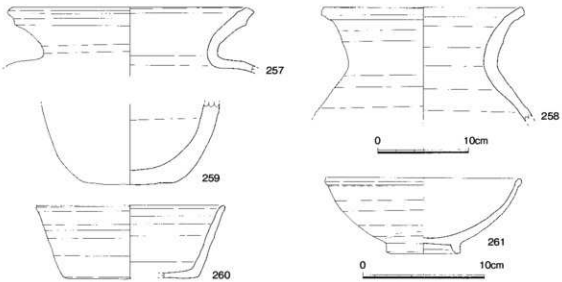


第36図　SX78実測図（1/20）

213は直口縁で、頸部は下方にわずかに開き、胴部との境にはわずかに段がつく。胎土は暗赤灰褐色で、にぶい光沢のある暗褐色の釉が内面から体部外面下位まで施されており、それより下位は露胎である。底部見込みには判読できないが墨書を有する。

第31図214～226、第32図228～237、第33図239・244は白磁である。214～216・222はⅢⅢ類で、灰黄白色～灰白色の釉が内面から体部外面下半まで施され、それより下位は露胎となる。214・215は内面見込みの釉が輪状に釉剥ぎされる。222の体部外面下位の露胎部分には「五」と読める墨書が記される。217～221はⅢⅣ類とみられる。220の口縁端部は屈折し、上端部は水平に近く、口縁端部には鋭い稜がつく。217・221の外面底部には墨書があり、どちらも「上」と記されていると思われる。224・239はⅢⅧ類で、内面体部中位で屈折し段がつく。224の内面見込みに片切彫りで花文が描かれ、239にはヘラによる草花文が描かれる239の底部には墨書が認められるが判読できない。223は浅形碗で、口縁部は外反し、体部中位で湾曲する。内面体部にヘラによる連続した曲線文、見込みには細い櫛目文が施される。225・226・244は小碗とみられ、内外面とも無文と考えられる。内面から外面体部下半まで施釉されるが、それ以下は露胎となる。底部見込みに墨書を有し、225は「田」、226は「綱司」、244は「十」と記されている。

228～232・234・235は碗である。228～230は碗Ⅴ類とみられ、内外面とも無文であり、体部と高台部の境まで施釉される。228の体部は丸みをもち、口縁部はやや外反する。体部外面は丁寧にヘラ削りされている。229の内面見込みと底部の境には小さな段が付き、見込み部分がわずかに凹む。230はⅤ－4類で口縁部は屈折し、上端部は水平に近い。231は碗Ⅳ類で、やや扁平な玉縁状口縁で、内面見込みに段はつかない。232・234・235は碗Ⅴ類で、直線的で高い高台がつく。体部と高台部の境まで施釉され、高台部は露胎となる。すべて高台見込みに墨書があり、232は花押、234は「上」、235は「小林」と記されている。また、234の内面見込みには短い弧状の櫛目文が描かれる。233・第33図243は壺の底部とみられ、輪状で器壁の厚い高台である。内面から外面体部と高台部の境まで施釉される。ともに底部見込みには墨書を有する。233は判読できず、243は「安」であろうか。236は小形の蓋で、上面中央部は盛り上がり、下面は平坦である。上面には黄白色の釉がかけられ、下面は露胎である。237は合子の蓋で、天井部は型打成形により輪花となる。淡黄白色の釉が外面に施され、

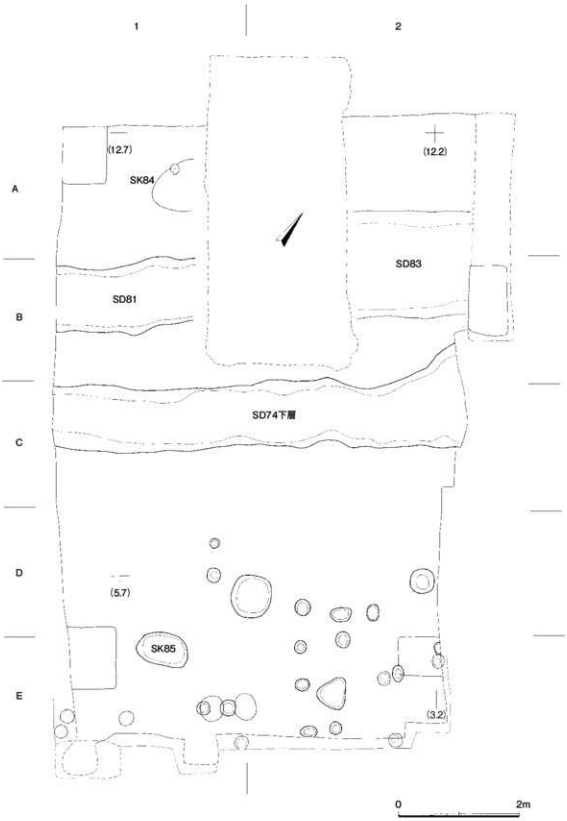


第37図　第３層包含層出土遺物実測図（257～259　1/4、その他は1/3）

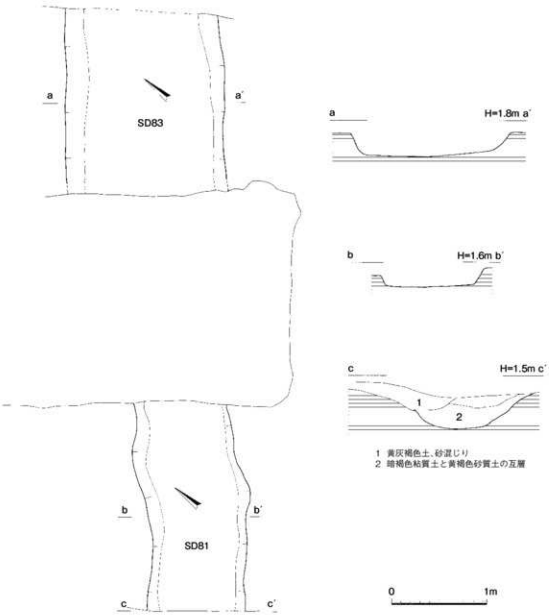
内面は露胎である。やや大型のもので、現福建省の窯で生産されたものとみられる。

第31図227、第33図238～242・245～249、第34図250～252は青磁である。238・240・242は皿で、238・240・241は同安窯系青磁である。238は皿Ⅰ－１a類で、238はやや黄色を帯びた明緑色の釉が施される。体部外面下半以下は露胎である。内面見込みに、櫛状の工具痕がみられるが文様ではないと考える。240は皿Ⅲ類とみられ、やや黄色を帯びた灰オリーブ色の釉が施される。外面体部下半以下は露胎となる。体部外面井はやや粗い縦の櫛目文が、内面にはやや細かい櫛目の短い弧文とヘラによる施文がなされる。内面見込みには沈線があり、中央部には「吉」の文字が陰刻される。241は皿Ⅰ－２b類で、黄色味の強い釉が施され、全面施釉後底部の釉が掻き取られる。内面見込みにはヘラ・櫛状工具による施文がみられる。242は龍泉窯系青磁皿Ⅰ－１c類で、内面には片切彫りの花文、細目の櫛状工具による施文を有する。

第31図227、第33図245～249、第34図250～252は青磁碗である。245・248は龍泉窯系青磁で、245は碗Ⅰ－６a類で、体部外面に縦の櫛目文のあと、片切彫りの蓮弁文が施される。内面にはヘラおよび櫛状工具、片切彫りによる施文がなされる。248は碗Ⅰ－b類で、内面見込みおよび体部に片切彫りの蓮花文が施される。文様は花文２単位に葉文が２単位である。227・246・247・249～252は同安窯系青磁碗である。246・247は碗Ⅱ類で、底部の器壁が厚く、口縁部はわずかに外反する。内外面とも無文で、釉はともにガラス質で光沢のある灰緑色を呈し、内面から体部上半まで施釉される。体部外面下半以下は露胎である。249はやや内湾するがほぼ直線的に立ち上がる体部に直口縁がつく。胎土はにぶい灰色である。内面と外面体部下半までややくすんだ暗オリーブ色の釉が施されるが、これ以下は露胎となる。内面見込みの釉は輪状に釉剥ぎされ、内外面とも無文である。高台畳付に目跡を有する。250は碗Ⅰ類に近似した形態をもつが、内面見込みの釉が輪状に釉剥ぎされ、内外面とも無文である。251は碗Ⅰ－１a類で、内湾気味に立ち上がる体部は上位でわずかに内側に屈曲する。外面は無文で、内面にヘラ・櫛状工具による施文がなされる。227・252は碗Ⅲ類で、227はにぶい黄緑色、252は灰オリーブ色の釉が内面から体部中位まで施されるが、体部下半以下は露胎となる。体部外面に幅広の粗い縦の櫛目文を有する。253は玉縁式丸瓦で、凹面には布目、凸面には格子目叩きが残る。



第38図　第４面上面および第４面調査区全体図（1/60）



第39図　SD81・83実測図（1/40）

この他にも多くの遺物が出土しており、景徳鎮窯系青白磁合子、中国陶器の甕、埼、銅銭「開元通寶」（初鋳年621年）・「咸平元寶」（初鋳年998年）、土製人形、鋳造関係遺物、ガラス製作関連遺物、獣骨、人骨等がある。

（2）土坑（SK）

SK82（第35図）　調査区の中央部やや南東寄り、C－1・2区で検出された。上述した溝SD74の肩部に位置する。遺構のプランは明確でないものの、長軸約0.8m、短軸0.6mの範囲で、白磁碗や中国陶器等の遺物がまとまって出土した。遺構上層で検出した遺物の標高は約2.6m、下層のものは約2.2m前後であるので、深さ約0.4m前後を測る。12世紀中頃～後半の廃棄土坑と考えられる。なお、SD74の出土遺物との年代的な先後関係は認められず、また、両者の出土遺物には接合関係もあるため、廃棄土坑としているが、SD74に廃棄された遺物の一部である可能性も十分に考えられる。

出土遺物（第35図）　254は中国陶器四耳壺で、胎土は黄橙色を呈し精良で、黄灰色の釉が内面肩部付近から外面体部中位付近まで施され、それ以下は露胎である。頸部はやや張った肩部から直に上

第40図　SD83出土遺物実測図（1/3）

方に屈折する。肩部に縦耳が貼付される。

255・256は同安窯系青磁碗で、255は碗Ⅲ－1a類で、体部上位で若干内側に屈曲し、口縁部は外反する。屈曲部には2本の沈線が巡る。内面見込みと体部の境には大きく段がついている。灰オリーブ色を呈する釉が内面から外面体部中位まで施され、それ以下は露胎となる。体部外面に幅広の粗い櫛目文が施される。256は碗Ⅱ類で、255とほぼ同様の形態だが、内外面とも無文である。

この他、底部糸切りで板状圧痕の残る土師器坏・皿、瓦器椀、白磁碗Ⅳ・Ⅴ類、龍泉窯系青磁Ⅰ類、中国陶器鉢・茶釉四耳壺、瓦等が出土している。

（3）獣骨集積遺構（SX）

SX78（第36図）　調査区の南東側、E－1区で検出された。掘り込みは確認できなかったが、約0.6m四方の範囲で、獣骨が折り重なって出土した。部位を特定できたものについては図中に示したが、大腿骨、脛骨、橈骨、上腕骨、肩甲骨等が比較的よく残存している。骨自体の遺存状態は悪く、脆く崩れやすい状態であった。骨の出土状況や残存状況からみると、解体はされているがそれほど細かく分断されておらず、皮等を剥いだ後、脚をバラバラにしてまとめて廃棄したものと考えられる。一部に炭化している部分があるが、廃棄前のものか、後のものか判断できない。肩甲骨の形状からウマである可能性が高いと考えられる。

骨以外の出土遺物としては、白磁碗Ⅳ類の小片が1点あるのみである。出土遺物がほとんどなく、断定は難しいが11世紀後半～12世紀前半の遺構と考えられようか。

（4）第3層包含層出土遺物（第37図）

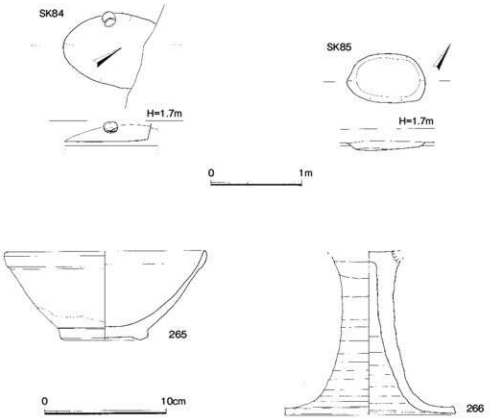
257～260は須恵器である。257は壺の口縁部～頸部片で、色調は灰色を呈する。258は甕の口縁部～頸部片で、色調は暗灰色を呈する。ともに内外面はナデ調整される。260は小形の壺もしくは瓶の底部片であろうか。外面には縄目叩きが縦方向から横方向へ格子状に施される。260は坏身である。底部は糸切りで、内外面ともナデ調整される。261は白磁碗Ⅱ類で、口縁部は小さな玉縁状をなす。内面から体部外面下半まで白色の釉が施され、それ以下は露胎となる。

この他、多くの遺物が出土しており、底部糸切りで板状圧痕の残る土師器坏・皿・高台付坏、黒色土器A類坏、白磁碗Ⅳ・Ⅷ類、皿Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅶ・Ⅷ類、中国陶器壺・鉢・四耳壺、龍泉窯系碗Ⅰ類、同安窯系碗Ⅰ類、青白磁碗、速江窯系青磁碗、高麗青磁碗、朝鮮王朝陶器碗、瓦質碗、製塩土器、縄目叩きの平瓦・丸瓦等が出土している。遺物の大まかな時期は9世紀代～12世紀後半である。

4）第4面（第38図）

先述のように、第3面から0.6～0.8m程掘り下げた、標高約1.6m前後に設定した調査面で、基盤となる砂層上面にあたる。溝1条、土坑1基、小穴15基を確認した。遺構は8世紀後半～12世紀前半代のものと考えられる。検出した遺構の中には第3面で掘り残したSD74下層等も含まれる。

また、第38図に色を落として表現した遺構は、第3面から第4面へ掘り下げ途中に、標高約1.7m前後で確認したもので、第4面上層として第4面と一括して報告する。この第4面上層は調査区の北西側および南東側付近で設定しており、溝1条、土坑1基、小穴9基を確認した。遺構の時期は



第41図　SK84・85実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

11 世紀後半～ 12 世紀前半代と考えられる。

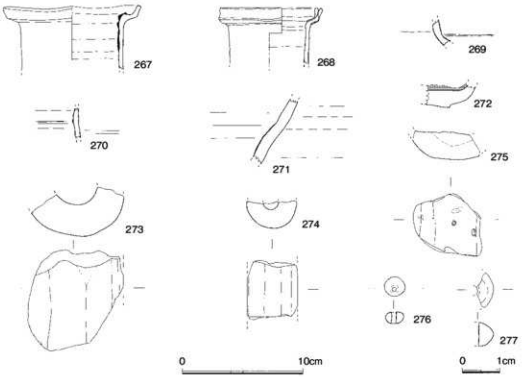
（1）溝（SD）

SD81・83（第 39 図）　調査区の北西側、B－1区で確認された。SD81 は第 4 面で、SD83 は第 4 面上層で検出したため、遺構番号はそれぞれに付したが、主軸方位や規模等を考慮し、同一の遺構と判断した。調査区中央部にある近代以降の構造物に壊されているが、調査区を横断するように延び、両端はさらに調査区外へ続いている。主軸は N-32°-E にとる。規模は、やや上層で確認できた SD83 側で 1.7m 前後、深さ約 0.2m で、SD81 側では幅 1.1m 前後、深さ 0.1m を測る。断面形は逆台形状を呈し、底部はやや中央部が下がるが、ほぼ平坦に近い。覆土は暗褐色粘質土と黄褐色砂質土の互層である。調査区西壁で確認した土層をみると、遺構としては検出できなかったものの、掘り直しおよび拡幅が行われた可能性がある。

第 3 面で確認した SD74 とほぼ並行するが、SD81・83 がやや西に振れる主軸をとっている。SD74 の掘り直しの可能性のある土層も含めて考えても SD74 に先行して掘削された溝であると考えられ、11 世紀後半～ 12 世紀前半に位置付けられよう。

出土遺物（第 40 図）　262 ～ 264 は SD81 出土の遺物である。262・263 は土師器皿で、ともに口径約 9 ㎝、器高 1.2㎝、底径 5.6㎝を測る。底部は糸切りで、263 の底部には板状圧痕が残る。ともに内外面ヨコナデ調整で、内底部は不定方向のナデ調整が施される。264 は須恵器坏蓋で、外面はヘラ削り後、ナデ調整を施す。色調は灰青色である。

この他、小片で少量だが SD81 からは中国陶器の大型容器、須恵器坏身、甕、平瓦等が出土してい



第42図　ガラス製作関連遺物・ガラス製品・鋳造関連遺物実測図（1/1、1/3）

る。また、SD83からは白磁皿Ⅱ・Ⅳ類、中国陶器壺、須恵器坏身・甕、底部糸切りで板状圧痕の残る土師器皿、平瓦等が出土している。

（2）土坑（SK）

SK84（第41図）　調査区の西端付近、A－1区に位置し、4層上面で検出した。東側を近代以降の構造物により壊されているが、長軸0.8m以上、短軸0.75mの楕円形状を呈すると考えられる。上部も大きく削平されており、深さは最大0.3mが残存する。11世紀後半～12世紀前半の土坑と考えられる。

出土遺物（第41図265）　265は白磁碗Ⅳ－2ａｃ類で、やや扁平な玉縁状口縁をもつ。淡灰黄白色の釉が内面から外面体部下半まで施され、それ以下は露胎となる。この他、製塩土器、須恵器坏身、土師器坏、国産陶器甕等の小片が出土している。

SK85（第41図）　調査区の南側、E－1区に位置する。長軸0.8m、短軸0.5mの楕円形状を呈し、深さは5～10cm程が残存する。8世紀後半の土坑に位置付けられよう。

出土遺物（第41図266）　266は須恵器の高坏脚部で、ヨコナデが施される。焼成は良好で、色調は青灰色を呈する。出土遺物はこの1点のみである。

5）ガラス製作関連遺物・ガラス製品・鋳造関連遺物（第42図）

調査では、数は多くないもののガラス製品や坩堝等のガラス製作関連遺物や、鞴羽口や坩堝、銅滓等の鋳造関連遺物が出土した。ここで出土遺構に関わらず、まとめて報告する。267～271はガラス製作時の坩堝として使用された中国無釉陶器水注である。269は内外面に、それ以外は内面にガラスが付着しており、被熱により器面が変質しているものもある。付着したガラスは一部鮮やかなエメラルドグリーンを呈するが、風化のため乳褐～乳灰色に発色する。

272は土製坩堝とみられ、浅い皿形を呈し、内面に厚く黒褐色の熔着物が付着している。273～275は輪羽口で、273は復元径8.0cm、復元孔径3.5cm、274は径4.0cm、孔径1.2cmを測る。275は273と同様の法量に復元できようか。内面が被熱のため黒色に変色している。

276・277はガラス小玉で、276は径5.5mm、277は径12mm程度に復元できる。どちらも鮮やかな発色のエメラルドグリーンを呈する。276は巻き付けにより製作されたと考えられるが、277の製作技法は不明である。

Ⅳ．結語

調査で検出した遺構についてはその時期も含め本文中に述べたが、最後に本調査区で検出した遺構について、その変遷や特徴を周辺調査区の成果を含めてまとめておきたい。遺構の主な時期は、8世紀、12世紀前半～13世紀中頃、16世紀の大きく3時期に大別される。

まず、8世紀の遺構として認識できたものは、8世紀後半に位置づけられる第4面のSK85のみだが、上面で確認した遺構や包含層中には8世紀代の須恵器が散見され、墨書須恵器もわずかながら出土している。周辺調査区においては、東側に隣接する第103次で8世紀前半の溝が検出され、南東側に位置する第172次、北西側の第80次調査区等で古代の区画溝とみられる溝の検出や古代瓦や銅製巡方・石帯・墨書須恵器、皇朝十二銭等の出土例もある。第172次調査区の東側には東西・南北方向の主軸を基本として整備された「官衙域」と推定される区画も存在する。この官衙域は約1町四方の範囲で復元されており、この範囲での調査区では地形を考慮しない東西・南北方位の主軸を採る溝が多数検出されている。さらに博多浜中央部から北側では「集落域」と推定される区画があり、現在の町割りに近い主軸を採る遺構が確認されている。西部域ではN-23°-W前後の主軸方位を採る「港湾域」とされる区画の存在も推定されている。本調査区はこの港湾域推定範囲に含まれ、当該期の遺構の拡がりが確認できたといえよう。

また、包含層からは弥生時代～古墳時代の土器・土師器も少量だが出土しており、遺構は確認できなかったものの、砂丘Ⅰの西半部中心に砂丘Ⅱに展開していた集落域・墓域の拡がりが窺える。

12世紀前半から13世紀中頃の時期には、第2・3面で検出した遺構の大半が所属し、溝や墓、土坑が営まれている。検出された2条の溝は、SD81・83が11世紀後半から12世紀前半、SD74は12世紀前半頃には掘削されたと考えられ、主軸方位はそれぞれN-32°-E、N-53°-Eに採っている。また、溝とほぼ同時期に営まれた、溝に直交するような主軸方位をとる2基の墓も検出された。中世前半期は鴻臚館の廃絶により、貿易拠点としての機能が博多に移され、「博多」が最も繁栄する時期といえる。これまでの調査成果とこれらに基づく諸研究により、博多に貿易の主体となり大きな役割を果たした宋商人の居住地である「博多津唐房」が存在したことが明らかにされている。その所在地は博多浜西部域の「港湾域」を中心とした範囲と考えられており、本調査地点もこれに含まれている。今回の調査では、建物跡は検出されなかったが、確認された溝や墓は、当時の街区・町割りを考えるうえで重要であるといえる。また、唐房と宋商人の存在が窺うことのできる遺物としては、多種多様な貿易陶磁器類と押圧波状文瓦があげられよう。

調査では13世紀後半代～14世紀代に位置づけられる遺構はわずかに認められたものの、その前段階である12世紀～13世紀前半代の遺構のあり方と比較すると、やや希薄であるといえる。隣接する

第 103 次調査では 13 世紀後半～ 14 世紀前半に位置づけられる溝 1 条と、井戸 1 基が検出されており、現在の町割と異なる主軸方位を採る、櫛田神社と同じ方位であることが指摘されている。第 172 次調査区では、鎮西探題に関連すると考えられる遺構群が検出され、第 172 次・第 79 次調査地点を含む範囲に主要施設を配し、全体としては約 2 町の範囲に諸施設を配したものであったことが想定されている。13 世紀後半～ 14 世紀前半代の遺構が希薄であるという状況が、鎮西探題の設置に関わるものか否かは、周辺の調査を待って再検討を加えていきたい。

16 世紀代に位置付けられる遺構は、第 1 面の SK10 のみであるが、包含層中からは該期の遺物も散見され、第 103 次調査では 15 世紀後半～ 16 世紀前半の溝が検出される等、周辺調査区では 15 ～ 16 世紀代の溝や柵列等が検出されており、また現在の地割と一致する、太閤町割に伴う区画溝等も確認されている。

また、本調査区では少量ではあるが、ガラス製作に関連する遺物や鋳造関連遺物が出土している。第 172 次調査地では、多量のガラス製品および坩堝等のガラス製作関連遺物が出土し、第 79 次・第 85 次でもガラス製品の出土が認められ、周辺に製作工房が存在していた可能性が高いと考えられる。

写　真　図　版

（1）第1面調査区全景（南東から）

（2）第2面調査区全景（南東から）

図版２

（１）第３面調査区全景（南東から）

（２）第４面調査区全景（南東から）

（1）SK10（北から）

（2）SK13（北西から）

（3）SK27（西から）

（4）SX 1（北西から）

（5）SX48（北から）

（6）SX33・41・48（東から）

図版 4

（1）第 1 層A- 1 区　明青花碗出土状況（北から）

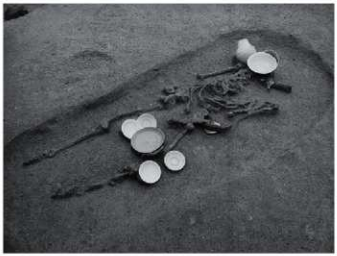
（2）第 1 層E- 1 区　陶器壷・青磁皿出土状況（南から）

（3）SK53（南から）

（4）SK110（西から）

（5）SK53･110およびSX72･101 ～ 109（北西から）

（6）SX72・101 ～ 109（北から）



（１）SK54（東から）

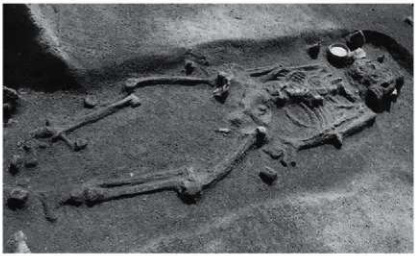
（２）SK54（南東から）

（３）SK54 青銅製品出土状況（１）（北西から）

（４）SK54 青銅製品出土状況（２）（西から）

図版6

（1）SK76上層（北から）



（2）SK76（東から）

（3）SK76 頭部付近近景（南西から）

（4）SK57（西から）

（1）SK76・SX78（南東から）

（2）SX78 検出時の状況（南東から）

（3）SX78 掘り下げ時の状況（南東から）

（4）SD74（南東から）

図版 8

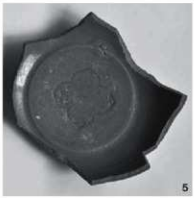
（1）SD74（北から）

（2）調査区西壁土層

（3）調査区東壁土層

（4）SK82（西から）

（5）SK84（南西から）


5

71

73

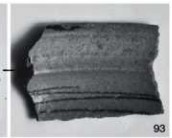
9

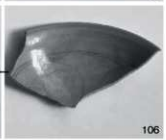
65

68

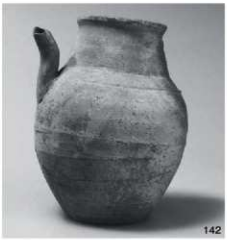
74

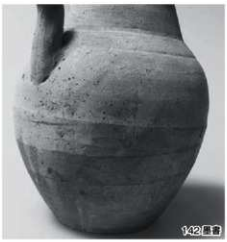
78


93


106

図版10


142

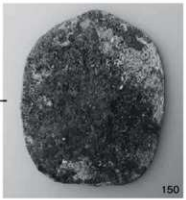

142墨書

149

144

147

148


150

143

155

151

152

153

107

129

133

171

174

180

172

178

187

182

186

212

213

222

226

213 墨書

232

235

233

234

276

報 告 書 抄 録

ふりがな	はかた 149 ―はかたいせきぐんだい 195 じちょうさほうこく―
書名	博多 149
副書名	博多遺跡群第 195 次調査報告
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第 1267 集
編著者名	吉田大輔
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒 810-8621　福岡県福岡市中央区天神 1 丁目 8 番 1 号　　TEL 092-711-4667
発行年月日	2015（平成 27）年 3 月 25 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積㎡	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
はかた ゆいせきぐん 博多遺跡群	ふくおかけんふくおかし 福岡県福岡市 はかた こうりゅうまち 博多区冷泉町	40132	020120	33° 59′ 35″	130° 41′ 17″	20130525 ～ 20130812	125	記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
博多遺跡群	集落	平安時代 鎌倉時代 室町時代	土坑、墓、溝、ピット	土師器、須恵器、瓦器、須恵質土器、瓦質土器、中国産陶磁器、国産陶器、朝鮮産陶磁器、土製品、石製品、金属製品	中世前半期を主体とした集落（都市）を確認

要　約	博多湾岸に形成された古砂丘上に展開する中世都市遺跡の調査である。12 ～ 13 世紀を主体とする溝、墓、中国産陶磁器類の廃棄土坑、獣骨集積遺構、土坑、ピットなどを確認した。中世前半では、12 世紀代に掘削されたとみられる溝 2 条は、当該期の町割に関連するものと考えられる。また、この溝にほぼ直交するように営まれた 12 世紀中頃～後半の墓 2 基は多くの副葬品を伴っていた。中世後期では、14 世紀後半から 15 世紀代に比定される遺構は確認できなかったが、16 世紀後半に廃絶されたとみられる土坑を確認した。

博　多　149

―博多遺跡群第 195 次調査報告―

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1267 集

2015（平成 27）年 3 月 25 日

発　行　　福岡市教育委員会

福岡市中央区天神一丁目 1 番 8 号

印　刷　　株式会社 西日本新聞印刷

福岡市博多区吉塚八丁目 2 番 15 号